

図書だより

〈第19号〉

昭和63年11月1日

呉工業高等専門学校

図書委員会



▲ 広島大学附属図書館西条分館

目 次

〔読書感想文〕

「零の発見」 (吉田洋一)	1 M	宮本 進生	2
「変身」 (カフカ)	1 C	中倉 弘勝	2
「ツタンカーメンの謎」 (吉村作治)	3 M	町支 学	3
「日本神話物語」 (川端康成 他)	3 A	松前美保子	4
「宴のあと」 (三島由紀夫)	4 E	山本 英明	4
「土に生きる —また楽しからずや—」 (飯吉精一) ..	4 C	大垣 英俊	6
「二十四の瞳」 (壺井 栄)	5 M	橋本 泰典	6
「都市の再生と下水道」 (中西準子)	5 C	伊藤 清隆	7

〔ソクラテスの死について〕

何故ソクラテスは脱獄しないで毒杯を仰ぐ道を選んだのか

— より長くではなく、より善く生きた男 —	2 E	檜垣 忠雄	9
— 誇り高き敗者 —	2 A	友広 忍	10

〔随 想〕

図書について	5 E	杉本 国昭	11
読書と私	5 A	山本 治	12
漫画の読み方	建築学科教官	西名 大作	13

〔窯場めぐり〕

山陰の窯場を訪ねて(三)	一般科目教官	榎本 紘二	16
--------------------	--------	-------------	----

〔海外だより〕

夏のヨーロッパ旅行	一般科目教官	岩根 三邦	19
-----------------	--------	-------------	----

〔図書館を訪ねて〕

広島大学附属図書館西条分館	図書係長	土佐 智義	22
お知らせ			23
新着図書案内			24
編集後記			32

読書感想文

「零の発見」

(吉田 洋一)

1M 宮 本 進 生

僕の読んだのは、吉田洋一著の「零の発見」と言う岩波新書で、インド人による零の発見を、その事実および背景から説き起こし、エジプト、ギリシャ、ローマなどの数を書き表すためのいろいろの工夫、ソロバンや計算尺の意義などについても書きながら、数字と計算法発達の様子を語った、数の本です。

僕が最初に驚いたのは、この本が昭和14年に書かれたものであることでした。何度か改版されていますが、内容が全く変わってないそうで驚きました。

最初はそろばんの話ではじまりました。ヨーロッパからそろばんが消えはじめたのは、15・6世紀のころで、その理由は、古くインドに起源を持つアラビア数字によって、筆算のためです。ここでいうソロバンとは、小学校の1年生あたりが使う計算器のようなもので、後に珠算とともにかなり発達をみせた日本のソロバンとはかなり異なる。

インド記数法(アラビア数字による)が、アラビア人によりヨーロッパにつたえられるまで、ヨーロッパにはたくさんの記数法がありましたが、そのどれにも「0」にあたる記号がなく、そのために位があがるごとに新たな、記号がもちいられました。

この本では、インド記数法は唯一の「計算数字」であり、また最もすぐれた「記録数字」でもある、と書いてありました。このことは僕に、インド記数法の他よりもすぐれた点を最もよく理解させるものでした。たしかに、インド記数法は別名、位取り記数法と呼ばれ計算には最も適しているし、他の記数法では計算は、ソロバンによっており、そのときに書きしるす記録数字でしかない。しかも、その記録も、「0」がないことにより、かなり長くなります。僕は、この本を読むまで、そんなことはまったく知

らずに、便利なアラビア数字を使ってきました。

この本には他に、コンピュータ内で行われる計算の方法や2進法の説明、筆算と紙の発達、小数記法や対数の考案と、それによる、計算尺の考案などについて書いてあり、零の発見が現代に、とてつもなく多くの影響をあたえていることがわかりました。

著者は最後に「無名のインド人が零の発見という画期的な事業をなしとげたことが、今日のように全世界に恩沢を与える日があることなど、その人自身、夢にも考えたことがあるだろうか。昔と今を問わず、みずから画期的と誇称した事業が真の意味で画期的であったためしはあまりこれを聞かないようである」と書いている。

僕自身、そんな画期的な発見ができればなどと、夢のようなことを考えたりもしました。

「変身」

(カフカ)

1C 中 倉 弘 勝

僕が、「変身」を読んでまず感じたことは、主人公であるグレーゴル・ザムザが毒虫に変身した理由がわからなかったという不服感です。変身の最初の一文で、グレーゴル・ザムザが変身しているのにもかかわらず最後の最後まで変身した原因はできませんでした。そのことが、ぼくにとって何よりも強く感じられました。この変身の原因に何もふれていないのは、彼の両親が医者などに彼を見せていないからです。僕としてはこれ以上おかしいことはないと思います。まず最初は彼の容体を何よりも考えてあげるべきだし、そのことを、誰にでもあるようなこととして受け入れてはいけなかったと思います。それなのに、彼の両親は、お金のことばかり気にしているなんてことは僕には信じられないことでした。しかも、時がたつにつれて両親が彼のことを手あらくあつかうのには、あまりにもかかわいそうだと思いました。

た。彼の妹のグレーテも最初は兄のグレーゴルであ
ろう毒虫に食事を作っていたけど、それも日に日
におそろかになってしまったし、彼の父は、グレー
ゴルのちょっとしたことで怒り、彼にリングをぶつ
けてしまったのです。こんなことってないと思い
ます。今まで家族のために、気のすまない仕事
をして、そのために毎朝早起きをして苦労しつづ
けていた彼に対してあまりにもひどすぎると思
います。そして彼の両親たちは、最後には、彼の
部屋にあるものをすべて他の部屋にうつしたの
です。これではまるで檻に入れられているの
と同じです。しかし、この事は、両親達がグ
レーゴルが動きやすくするためにしたことだ
ったので僕は少しうれいような思いがしま
した。だけどグレーゴルは、そのことを快く
思いませんでした。これは、親子といえども
気持ちを理解しあうことは、大変なんだと
教えられました。

そうして、月日がたっていくうちにグレー
ゴルは、リングの傷が原因で死んでしまいま
した。このことは、実際僕としても信じれ
ませんでした。あまりにかわいそうだった
ので信じるのができにくかったのかもしれ
ません。最後の最後まで、人間にもどれ
そうなきざしもないままに死んだグ
レーゴルには、いたたまれない思いがしま
す。このことが、グレー
ゴルの単なる悪夢だったとしたらどれ
だけの幸福に似た気持ちが感じられる
かわかりません。

ばくのグレーゴルの変身に対する考えは、
おそらくグレーゴルの仕事に対する不満
からきたものではないかと思ひます。グ
レーゴルが会社の場合、グレーゴルが
おくれると他にも影響がいつてしま
うので支配人は、グレーゴルに
対して厳しいし、何よりグレー
ゴルは、家族の借金を返さなければ
ならないのでやめるわけにもい
かずにおいつめられていくうち
にいつて変身してしまつたのでは
ないかと思ひます。自由に生
きていきたいという彼の願ひが、
このような形になってしまうん
てあまりにもむごすぎます。結
果的に彼の求めた自由とは、この
悪夢のようになつてしまふもの
で、それ以上を求めようとす
れば死に値してしまふのでは
ないかと思ひます。そして彼の
そのお人よしの性格から、悪
夢の中でも家族のことを思ひ自
分がいなくなればならぬこと
を確信して部屋の隅で死んで
いつたグレーゴル・ザムザに
は、言葉で言ひあらわせない
ような悲

しみが感じられました。

「ツタンカーメンの謎」

(吉村 作治)

3M 町 支 学

ツタンカーメン王墓発見後、発掘関係者の死が続
いたために、マスコミは、カーターが、永遠の眠り
についていた王を起こしたことで、亡き王の怒りが
爆発したと解釈し、“ファラオの呪い”という言葉
をつくり上げた。しかし、本当に“ファラオの呪い”
で死んだのだろうか。世に言われている“ファラオ
の呪い”のうわさは、カーナボン卿が亡くなった時
に起きた不思議な偶然が発端だった。カーナボン卿
が亡くなったまさにその瞬間、カイロ中の電灯が消
え、その停電の原因はその後の調査によつてもわか
らなかった。さらに不思議なことには、カーナボン
卿の息子のポーチェスター卿によると、彼の父が亡
くなった瞬間に、故郷のハイクレアで、カーナボン
卿の愛犬が突然苦しうに吠え、ぱったりと死んだ
というのである。「ロンドン・タイムズ」との独占
契約でカーナボン卿に反感をもつていた世界中の新
聞が、カーナボン卿の死を“ファラオの呪い”とし
て公表した。うわさはうわさを呼び、あることない
ことが書きたてられた。新聞記者たちにとって都合
のよいことに、この“ファラオの呪い”が世界中に
知れわたつた時に、発掘関係者たちが何人か續いて
亡くなった。メトロポリタン美術館館員で王墓発見
後、情熱的に遺物の保存を行なつてきたA・C・メ
ースが、持病の肋膜炎が悪化して亡くなった。カイ
ロでは、王墓に入った旅行者が一人、タクシーにひ
かれて死んだ。また大英博物館副主事が床の中で死
体で発見され、ルーブルのエジプト学者が高齡のた
めに死んだ。さらにエジプトへ養生のために訪れた
カーナボン卿の友人ジョージ・J・グルードが病の
ために死に、英国のジャーナリストで、かつてエジ
プト学者だったアーサー・ウェイゴールも亡くなつ
た。これらの人々の死は、すべて“ファラオの呪い”
のせいとされ“ファラオの呪い”の犠牲者とされた
者は21人にものぼつた。大英博物館には、王墓から

の遺品は、一品も納められていないにもかかわらず、博物館の遺物箱にラベルを貼っていた作業員が仕事中に死んだのでさえ“呪い”のせいになされた。輝かしい栄光の裏にある不運な死、これほどドラマチックな話題をマスコミが放っておくはずがなかった。人々の深層心理に乗ってマスコミが作り上げた“ファラオの呪い”という寓話は、またたく間に定説となっていくたのである。しかし、カーターや王墓の発掘者の何人もが天寿をまっとうしていることから“呪い”がつくり話であることは明らかである。

この本では“ファラオの呪い”は否定されているが、ぼくは信じたい。誰も自分の死後、死体が人前にさらされたり、墓が荒らされたりすることを喜ぶ人はいないだろうし、死者はやすらかに眠らなければならないと考える人は、エジプト人だけではないからだ。だから死者の家である墓を暴くことは“呪う”べきことなのだろうと思った。

「日本神話物語」

(川端康成、他)

3A 松 前 美保子

世界史の時間にギリシャ神話を習った時、イザナギ、イザナミという日本神話の神のことが少しでてきたことで、この本に決めました。

イザナギが死の国のけがれを洗っている時に鼻をこすって生まれた男神が、スサノオです。スサノオは海の王でしたが、遠い国に追いはられ、また高天原も追放されました。ヤマタのオロチを退治したのもスサノオです。その時、助けたクシナダ姫を妻にし、高天原であばれまわったスサノオとは思われないほどおだやかになり、出雲の国をおさめていました。

そのスサノオの娘スセリ姫のすえの子供が、「イナバの白うさぎ」にでてくる親切な王子オオナムチです。白うさぎを助けたところまでは誰でも知っていますが、助けた後でオオナムチは、意地の悪い兄達に殺されそうになります。そして、知恵をみかくための旅に出て、知恵の神スナビコナの力をかりて、出雲を治める立派な大国主となりました。

これで天の巻は終わりです。

こういう神話などは、神様が主人公になって物語られています。昔の日本人は、祖先達を神様だと信じていたのでどうしても物語は神様を主体としているのだと思います。どうして太陽と月とが昼夜別々に現われるのか、どうして人間は死ぬのかというような諸現象も、今日では学問の領域に入る事柄がその当時では神話で説明されたというのがこの本を読んで、よくわかりました。

日本の神話の中には、祖先がどんな考えを持っていたか、どんな生活をしていたかなどを、教えてくれる沢山の材料があると思います。神話は、私達が祖先から受け継いでいる大きな文化的財産であり、これを守り、理解して後の世に伝えることが必要だと思います。

「宴のあと」

(三島由紀夫)

4E 山 本 英 明

この作品は、50才になる、雪後庵という料理屋の女主、福沢かづと、そして、60才の元大臣の野口雄賢の2人の出会いから別れまでの中でおこる事柄をえがいているものである。なんとも奇妙な2人の出会いがこの作品を面白くしていると思う。この2人の出会いは、雪後庵で、霞弦会という大使たちのクラス会のようなものが行われることになり、その中に野口氏がいたのである。その席で、脳溢血で環氏が亡くなるという事件から、2人の交際が始まったのだ。その2人の交際というのは、この作品の時代と2人の年齢からは考えられないぐらいの今の自分たちにも近いものがあり、それがまた興味をそそるところでもある。

歳からは思いもつかぬほどの美貌と豊麗な姿のかづは、性格は明るく愛されることよりは愛することの方が好きといういつの時代でも持てはやされるような女性で、60になる野口は、ドイツ書をいつも読んでいるような知性人でそして古風で今でいう堅い人といったところだろうか。かづはその野口にどんどん引かれていき、会えないと、嫉妬したりして、

今の時代がそのままえがかれているようで自分達がその場にいるようにも感じられた。そしてこの2人は結婚し、そして題の“宴”が始まる。都知事選挙に革新党から出馬し、そして、相手は、雪後庵をひいきにしている保守党の者である。かづは雪後庵の女主なので政治にもいくらか関心があり、選挙運動に首をつっこんだ。そのことに激怒し、そのあとの裏切に激怒しながらも最後には、いつもは新調した背広はきらう野口も選挙にはかづの作った背広を着るという優しさを感じさせられた。

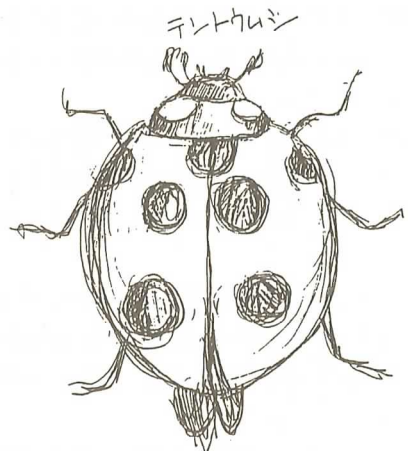
かづは野口のために、そして自分の幸せのために、野口を当選させるため、雪後庵を担保に入れてまでお金を作り選挙にのぞんだが、何倍もの勢力をもつ保守党にまけてしまった。それはいいかえれば、金の力に負けたといってもおかしくない。そのかづの努力は、野口にとっては、御節介で、選挙で負ければ水の泡である。いつの時代でもそれは共通で、金の力というものは、人を幸福にも不幸にもしてしまうものである。そしてこの“宴”のあとにまっていたのは別れだった。何もかも失ってしまったかづに残されたものは雪後庵だけで、それをとりもどすために、金の力で失ったものを、保守党をゆすって金の力でとりもどそうとしたのを野口に知られ、彼は、別れと、雪後庵を手放すかの2つをかづに選べせた。かづは別れの方を選んだが、それが本当によかったのだろうか。何もかも失ったかづにとって雪後庵だけが残された幸福だったのか。野口にとっても、その2つを選択させることはかづがどちらをとったとしても幸福になれなかったのではないかと思う。始め、かづは身寄りのない自分の死後を恐れていたところに野口があらわれ、野口家の墓に入れるということがこれからの人生を幸福にしていくものだったのが、結局は一人身を選んでしまった。野口にしても、その古風な男が、3度もかづを許すことになっても幸せになれるとは考えられない。

この宴によって2人には、一つの節のようなものができ、そして自分たちの歳や、生き方を感じとったのではないかと思う。そして、つぎの宴が始まったのである。

こうしてこの作品を読み終えてみると、若い者にとっても、老いても、共通なものは、いつまでたっても幸福を求めていることである。愛することも別

れることも、この全く別の性格をもつ2人を主人公とすることで、そのことが見受けられる。一つの宴が終って、それが勝利であっても、敗北であっても、求めるものはやはり幸福である。

そして最後に、2人の選挙をたすけていた山崎の手紙の中で「丁度洗い物を遠心分離の脱水器に投ずるとあまりに早い廻転のさなかに今投じたシャツも下着も見えなくなってしまう、その痛烈な作用を愛します。それは必ずしも浄化でありますまいが、忘れてよいものを忘れさせ、見失ってよいものを見失わせる、一種の無機的な陶酔を我々に及ぼすのです…」とあり、これは、主人公の2人が本当の姿を見せすぎたために不幸を得たのかもしれないということを表しているような気がする。人と人との関係がほんの少しのことで勝負を決定するということを思い知らされたような気がする。山崎の手紙の中に書いてあることは、人にとって一つの逃げ道ともとれるが、それが本当の幸福なのであるかも知れない。



(by 4A 西谷幸枝)

「土木に生きる —また楽しからずや—」

(飯吉 精一)

4C 大垣 英俊

自分がなぜこのような“土木に生きる—また楽しからずや”という本を選んだかという、最初はどんな本でもいいやという感じだったのが、ふとこの本を見たら、おもしろい題名だなという強い関心がでてきていつのまにか借りてしまったというわけである。それと自分も一応は土木に生きていくわけだから、読んで少しの役にでもたてばいいと思ったからである。

簡潔にこの本のことをいうと、著者と土木との出会い、土木でたずさわった仕事での経験談が、ちょっと昔のことだが書かれてある。

土木といってもほとんどの人が、建設と土木を混ぜあわせているが、他にも、自分でも知らないということが、山ほどあるだろう。

戦前、土木業と建設業とは別々で会社がつくられ発展したわけだが、現在では、土木建設業として多大な業績をあげているのである。

しかし、例を挙げてみると、青函トンネル・本四連絡橋は土木の分野での大きな事業である。

この本は、現在のことなどは書かれてないが、ここに至るまでの土木の発展を、著者の歩んできた道を通して書かれてある。

実際にこの本を読んで見て、土木専門用語など専門的なことが書いてあるので、少し不明な点もでてくるがわかりやすく土木のことが書かれてあるように思う。

これからは、この著者と同じようにとはいわないが自分も土木に生きていくわけだから、多少なりとも、土木に対する関心を高めるためにも、よい本だと思った。

最後に、土木というのは、これからは自分達が背負っていかなければならないので、できるだけこのような本を読んで、本を通して何かを盗んでのちのち役に立つように生かしていきたい。

「二十四の瞳」

(壺井 栄)

5M 橋本 泰典

「十年をひと昔というならば、この物語の発端は今からふた昔半もまえのことになる。世の中のできごととはといえば、……。瀬戸内海べりの一寒村へ、若い女の先生が赴任してきた。」

これが、この小説の書き出しです。とても上手な語り調の文体で、最初からスムーズに読み始められたので、最後まですらすらと読むことができました。

この島の岬の分教場に赴任してきた女の先生は大石先生という名であった。今までの女先生とは違い、洋服を着て、自転車に乗ってやって来るので、村の人達からは初めのうちは白い眼で見られます。しかし、一年生の十二名に対する思いやりの心がしだいに周囲の人々に理解されてくるに従って、教え子達からは慕われ、村の人達からも少しずつ親しみを感ぜられるようになってきます。このあたりはいかにも田舎の学校という雰囲気がよく出ており、村の人達の気質の良さが感じられます。

二学期の始め、村の浜辺へ生徒達を連れて行った時、子供達がいたずらで作った落とし穴に大石先生が落ちてしまい、アキレス腱を切り、学校を休まなくてはならないことになりました。この時生徒達はみんなで親にだまって岬から八キロも離れた大石先生の所へ訪ねて行きます。一年生の足には八キロの道は遠く、途中で泣き出す者も出てきて、生徒達はもうこれ以上歩けぬくらい疲れ、困りきっているところに病院帰りの大石先生がバスから降りてきます。生徒達は先生に会えたうれしきで、先生はわざわざ生徒達が会いに来てくれたうれしきで泣きじゃくります。ここは、生徒達と先生のうれしきの描写がとてもうまく書かれているとともに、生徒達と先生の絆の強さをとても強く感じる場面であり、ここまで生徒に慕われる大石先生の人間性をも感じさせるものがあります。

ある日先生が、「天皇陛下はどこにいらっしゃいますか。」と聞くと、ある生徒が、「天皇陛下は、押入れの中におります。」と答える。この無邪気な答え

の中に筆者の絶対的天皇制に対する皮肉たっぷりの批判の気持ちがこめられていると思う。

田舎の小学校の先生と生徒達の触合いが明るく書かれていた前半に比べ、後半はムードが一変し、暗い雰囲気になります。

大石先生は本校に赴任し、五年生となった彼女の生徒達も本校へ通い始めます。しかし、この頃から昭和の激動が始まります。戦争と軍国主義は学校の教室の中にまで入ってきます。上海事変、自由の弾圧、太平洋戦争へ突入、大石先生は結婚しましたが、船員の夫は戦死してしまいます。十二人の子供達は、三人が戦死、一人が失明、女生徒一人は病死、一人は消息も知れず、その他の生徒達の境遇にも激しい変化が起きていました。

この小説の主題は、やはり軍国主義、戦争への批判であったと思います。戦争は、田舎の小さな学校へも影響し、生徒達の間の友情をも壊してしまいます。そして、常に明るさを失わない大石先生が存在や、生徒達の純真な心が、より一層戦争の悲参さを強調していると思う。



「都市の再生と下水道」

(中西 準子)

5C 伊藤清隆

まずこの『都市の再生と下水道』という本を読んで真っ先に感じたことは、私達が下水道というものについて大変な誤解をしていることだ。この本を読めば、誰もが感じると思う。

下水道は、本来、人間が生活する上で余り必要とされる施設ではなかった。しかし、現在のように人口が増加し、工業が発達して行く中では話は別だ。工場が立ち並ぶと、もちろんそこには、工場で使用された工場排水が生じる。また、それだけではなく、家庭からの汚水も、人口増加に比例して増していく。昔は下水道や処理場はなく、そのまま河川に垂れ流しにしても、河川には自浄作用が有り、河川の水は清浄化されていたのだが、現在の状態ではそうはいかず、河川の自浄作用がおいつけなほどの汚水が流れる。そのため、下水道や処理場が必要となっている。したがって、現在では下水道が、生活関連施設となっているのである。このように生活関連施設となっている下水道であるから、これが普及すればするほど都市の河川は、きれいになるとか、処理場の大きいものを造れば、効率的で、河川はきれいになるとおもうのも当然である。ところが、この本は、その下水道や処理場が、実際はおせじにも効率よく作用しているとは言えない現実の姿を、豊富なデータや下水道に関する研究と住民運動とのかかわりによって明らかにしたものである。

著者が最も問題にしているのは、下水道がいまや、生活関連施設と看板をかかげながら、内容的には産業基盤施設へと変わっている点であると思う。下水道の問題というのは、『たんなる技術的問題と考える人が多い。』と著者がいっているが、私もこの本を読むまでそう思っているひとりだった。しかし、今では少し考え方が変わった。下水道の問題というのは、たんなる技術的問題だけで終らず、日本の公害対策と水資源問題の将来を規定し、さらに地方財政の方向を大きく左右しつつあると思われる。

日本の下水道政策の特色は、工場排水と家庭下水との混合処理と流域下水道政策に象徴される巨大処理場の建設である。混合処理をすると次のような不都合が起こってくる。ある工場からの排水に、排水基準を越す有害物質や有毒物質が含有されていても、他の工場からの排水にそれとは異なる有害物質や有毒物質が含有されていると、排水量は増えるため、その排水中に占めるそれぞれの物質の濃度は、当然、工場を出るときよりも処理場を出るときの方が、何も処理しなくても低くなっているのはあたりまえである。しかし、国が行う調査では水質だけを見ているので、とても良い処理場に見えるのである。このことを私なりに例えてみると、100 cm^3 の箱が2つあり、片方には10 cm^3 のみかんを1個、もう一方には、20 cm^3 のりんごを1個入れる。みかんが箱に占める割合は $10/100 = 0.1$ 、りんごが箱に占める割合は $20/100 = 0.20$ であるがこの2つの箱をつなぎ合わせ、1つの箱として考えると、みかんがつけぎ合わせた箱に占める割合は $10/200 = 0.05$ 、りんごがつけぎ合わせた箱に占める割合は $20/200 = 0.1$ とそれぞれ前述の半になる。これは当然である。この例で、つけぎ合わせた箱というのは実際では処理場で、みかんとりんごは、有害、有毒物質で、例えば水銀等であると考えれば理解は容易であると思う。このように考えてみると処理場はどんな働きをしているのか？ 何もしないでも濃度は減るではないかということになる。現実の処理場が何も処理していないというのではないが、著者のデータを見る限りその効果はあまり高いものではない。

又、我が国ですみめられている流域下水道も、前に述べた悪い例の典型だと思う。しかし行政は「経済的だ、有能な技術者が処理場を管理できる」などと言って流域下水道政策をとるが、著者が調べた結果、小規模処理場をいくつか造っても大差はなかった。なのになぜ流域下水道をつくるのか？ これは政治家等の力や下水道法がおおきく関与しているということだった。

これらのことをこの本で知り驚きをうけました。驚きをうけたのは私だけでなくこの本の出版以前に著者の論文（『浮間処理場批判——その経過と現状——』）が載った後、いくつかの住民運動を呼び起こした。このような経過をたどって、公害の防止は

汚濁原因者の責任と分担で解決するという「PPP」（汚染者負担の原則）が確立された。そのためそれぞれの工場に処理施設がつくられるようになったが、それはほとんどが経済力のある大企業であって中小企業では処理施設はあまりみられないのが実情だった。しかも処理場を造っても実際には処理をしないまま排水している工場もあることが著者の調査からわかる、「PPP」が確立されても、処理されないままの処理場は、一向に変化していないのが実情だった。

しかしこの本のデータは古いものであり、今現在の処理状態について、機会があればみてみたい。

下水道が、企業の負うべき責任を自治体が肩代りし、その陰で企業が垂れ流しできるという事態が生じるという今の下水処理の方法や下水処理の基本となっている下水道法についてもう一度考え直し、下水道や処理場が、今ではなくてはならない施設となっていることを考慮に入れて、技術者レベルでなく住民の立場で考え直すべきである。

○「図書室では静粛に」

○「読んだ本はもとの位置へ」

○「帯出期間を守ろう」



○「図書室での飲食はやめよう」

ソクラテスの死について

「倫・社」レポートの一部を掲載しますが、今回は、ユニークなもの・自分の頭で考え自分の言葉で表現されたものを基準に、選んでもらいました。

——より長くではなく、
より善く生きた男——

2E 檜 垣 忠 雄

ソクラテスは何故脱獄しないで毒杯を仰ぐ道を選んだのか——。その答のヒントはプラトン著『クリトン』にあると思われる。ソクラテスに脱獄を勧める親友クリトンとそれを断わるソクラテスとの会話がこの物語の内容である。これを参考にして、僕なりの意見を述べたいと思う。

『クリトン』には脱獄をしようとししない理由をこまごまクリトンに語っている。物語のなかには理解することが難かしい箇所がいくつかあり、ソクラテスの意志、心中を完全に把握し得なかったので、くどいようだが僕なりの考え方であることをお忘れなく。

脱獄しなかった理由は1つではなくいくつかあると思うが、僕の意見では2つ考えられる。

まず1つ目。脱獄を助けてくれる友人に迷惑をかけたくないという理由である。しかしこの理由はソクラテスが脱獄しなかった真の理由とは思われない。あくまでこの理由は間接的なものにすぎないと思う。

残りの1つの理由が真の理由と僕は思う。その1つの理由は『クリトン』では本文としてこまごまソクラテスによって語られている。それらを簡潔にまとめて、その理由というものを浮き彫りにしたいと思う。

では2つ目。クリトンは言う。ただ金を使う気さえ僕にあれば君（ソクラテス）を救い出すことが出来たはずなのにそれを怠ったがために君を死なせてしまったと、大衆が思うだろうと。それに対しソクラテスは次のように言う。尊重に値するのは有益な意見であって、有害なものでない。ところで有益な

のは智者の意見で有害なのは無知者の意見である。そして正と不正と、醜と美と、善と悪とに関して、僕達は大衆の意見に従いまたこれを怖れるということとはすべきでない。むしろ他の総ての人を束にしたよりも更に畏み怖れられるべきその道の専門家（僕の思うところこの専門家とは「智者」のことだと思うが）そのただ一人の専門家の意見に従うべきである、と言ってクリトンの言を否定している。さらにソクラテスは言う。人はどんな場合も不正を行ってはならない。それ故、人は不正に報いるに不正をもってすべきではない。人に禍害を加えることは不正であるから、人の不正に対し、報復したり禍害を加えたりしてはならない。そして僕（ソクラテス）が脱獄するという行為は不正行為に他ならない。何故不正行為なのかといえば、脱獄は国家及び国法に禍害を加えていることになるためである。国家が僕に不正を働いているとしても、僕は禍害を加えるような行為は禁物なのである。祖国とは父よりも母よりもまたその他すべての祖先よりももっと貴ぶべく、もっと畏敬すべくまたもっと神聖であって、神々や理性ある人間達の間で他に越えて尊重されるべきものである。そうすればその祖国が忍従を命ずるものはそれが殴打であれ、投獄であれ、黙ってこれに忍従しなければならないのだ。

ソクラテスはだいたい上のようなことを述べている。複雑な理由だと最初僕は思ったがよくよく考えてみると「ただ生きるのではなく、より善く生きる」という理念に忠実であっただけである。もし彼が脱獄すれば彼は「より善く生きる」という理念を自ら捨てることになる。より善く生きるために彼は脱獄せず、毒杯を仰ぐ道を選んだのである。

〈参考文献〉

岩波書店：プラトン著『クリトン』

— 誇り高き敗者 —

2A 友 広 忍

私はソクラテスがなぜその道を選んだかを知るためには、まずソクラテス自身を知ることが大切だと思い、今までのノートや教科書などを読んでみました。まずソクラテスは人間にとっての美しさ、人間とはどう生きるべきなのかをソフィストがまちがった議論を論じている中で一人で考えていきました。そして人々と語り合い話し合う中で新しいより真実に近いことを生ませ、反面まちがっていることは徹底的に退治しようと思いました。それにこれは私の勝手な意見ですが、この人は人間には学問では言い表せない部分があることを全く信じなかったのではないかっていうように思います。これは本当に勝手な意見だとは思いますが、こう思わせるほどこの人の考え方はすべてどこかの数式のように答えのできそうなものだと思います。そのソクラテスがほとんど無実の罪でうったえられ30票の差で有罪になってしまったが、そのあとの言葉からも分かるように、ソクラテスは自分のやったことをまちがっていると思ってない。もし自分が悪いと思ったとすると、ソクラテスは妻子を連れてきてみんなにあやまったかもしれない。ただこのときソクラテスが、死刑になったあともう一度チャンスをやるからみんなにお願いしろと言われても多分変えはしなかっただろうと思う。だからこの人はこの地点で命と真実とを比較して真実を選んだということになる。だから私は脱獄するとかしないとかの問題ではなく、ソクラテスにとって最も重要な問題は、自分がやったことが正しいか正しくないかということにあったのだと思う。あとで「逃げろ」と言うのではなくソクラテスはこのときアテナイ人諸君に自分の言っていることが真実だということを認めて欲しかっただろうと思う。ソクラテスは自分で自分が正しいことを確信しつつ幸せに死を決意したと思う。ソクラテスは前も学習したように死がこわいとは思ってなかった。だから自分が一生かけてもちつづけたものを、その未知の世界のために捨てられはしなかったのだろう。もし

このあとソクラテスが脱獄していたら、だれでもなく自分自身の中で確信した真実のいいかげんさを感じその後の人生が自分に反したものになるだろうと分かっていたことだろう。またこの人が心から愛していた国の人々から公正な裁判を通して、自分がまちがっていると言われてみんなを多少うらんだことだろう。ただソクラテスは、だからと言って生まれたときからずっと愛してきた国のルールを裏切るとは決してできなかっただろう。いくらそのルールが納得できないルールにしてもその国のみんなが決めてみんなに認められている以上、それは正しいことであり正しいことである限りソクラテスはそれを破ることはできなかっただろう。ソクラテスは最後の最大の決戦で最後まで自分の信念を捨てず、アテナイ人によって敗れた誇り高き敗者であると思う。

〈参考資料〉

プラトン『クリトン』



随 想

図書について

5 E 杉 本 国 昭

もうかなり前になりますが、図書の貸し出し、返却にコンピューターを使うようになりました。このおかげで、書名、登録番号などをいちいち書かなくてもよくなり、本を借りるのが楽になりました。本を借りる時は、カードといっしょに本を渡すだけで、後は何もしなくていいのです。時々、機械が番号をなかなか読まず、最後には図書の人が手で番号を打ち込むこともあります、それでも打ち込むものが少ないだけ、手で書くよりは早いようです。本の後ろには、返却日などを書く表が付いていますが、これに借りる人の名前を書かず、日付だけで済ますようになったのも、コンピューターのおかげです。この表に、知っている人の名を見つけて、「こんな本を読むのか。」とよく思いましたが、そういうこともなくなるでしょう。

新しい設備として他には、本を黙って持ち出そうとしても、音がしてばれてしまう仕掛けが付きしました。この音は、本を持ち出す時だけでなく、持ち込む時にもするので、かばんなどに本を入れたまま、うっかり機械（入口の所にある、枠のようなやつ）の前を通ると、かなり大きい音がして、恥ずかしい思いをすることになります。照れ隠しに、「ああ、本持っとの忘れとった。」と言う人もいます。ぼくも2回ほど鳴らしたことがあります。本を持ったまま、図書室に入るには、カウンターを通して持って入るか、持って入らずにカウンターの上に、本を置いておくかしますが、この時、図書の人に黙っていると、置いてあった本が、いつの間にか返却されてしまうので、注意が必要です。

本をたくさん借りている人が、それを返して他の本を借りようとする時には、外にあるポストに本を返すと、面倒なことになります。というのも、コン

ピューターが次に借りる本を、冊数オーバーとみなして拒否するからです。つまり、ポストに入れただけでは、返却したことには、ならないのです。こういう時、図書の人は、鍵を持って外へ出て行き、ポストの本を持って帰って来ます。その中から返却した本を探し、コンピューターに入力すると、やっと本が借りれます。その後たぶんこう言われるはずで、「今度から、すぐ借りる時は、直接ここへ返して」と。

図書室には、文庫本もかなりありますが、新しく入って来る物には、表紙が付くようになりました。近頃は、ビニールシートでコーティングまでされています。文庫本の表紙には、その本のあらすじが書いてあり、本を選ぶ時、これはとても具合がいいのではないのでしょうか。それは、他の本の、他書紹介を見なくても、題のおもしろそうなものを見つけて、表紙のあらすじを読めばいいからです。文庫本には、ボロボロのものがちょくちょくありますが、こういう本は、よく借りられるもので、おもしろいものが多いようです。

ぼくは本を読むのが好きなので、よく本を読みますが、特に試験の前は、嫌な事から逃げたいという心理が働くためか、勉強しなくてはいけません、つい本を読んでしまいます。「よし、今日でこれを読みあげてしまおう。」と思ったり、「この本を読んだら勉強しよう。」と決めたのに、読むとすぐに新しい本を、借りたりしてしまいます。こういう時に読む本は、普段よりおもしろく感じるから不思議です。試験前になると、全然、試験に関係のないことに、いつもより熱中してしまう人は、案外多いのではないのでしょうか。

おもしろそうだと思って借りた本が、あまりおもしろくないことはよくあります。こういう時は、適当に飛ばして読むのですが、最後の方は以外におもしろくて、結局、また初めからじつくりと、読み直したりすることもあります。おもしろいか、良かったという本はかなりあります。しかし、本当に感動するような本は、まれにしかありません。こうい

う本を読むと読み入ってしまって、いつの間にか、何時間も経っています。読んだ後は、何もする気が起きず、ぼうっとしていますが、こういう時は、変に充実感があって気持ちよく、次に読む本も、こんな本ではないかと期待して、また他の本を読みたくくなります。

読書と私

5A 山 本 治

夏休みと言えば、読書感想文の宿題がつきものだった。このねらいは、長い休みの間に本を一冊は読ませる事、読んで内容を理解できる様にすることにあると思う。TVの普及してきた今日、情報、知識等ほとんど全てのものがTVから得る事が出来る。つまり字を読んで理解するより、見て、聞いて理解できる時代なのである。そんな中で本を読むという事は必要なのかと考えつつ、じゃあ何故自分は本を読むのかと、そういった矛盾に悩み、その悩みを解決するために読書について、もっとよく考えてみる事にしたのである。

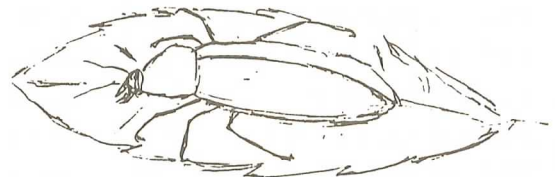
確かに情報や知識は、本よりはTVやラジオ等、他のものによって得られている。本を読む時間より、TVを見る時間の方が長い。本を読まない日はあっても、TVを見ない日はない。と、いった様にTV人間が増えていると言っても過言ではない。しかし、本は無くならない。自分において考えてみると、自分も全くのTV人間であり、本を読むのは、TVで面白い番組がない時、バス、電車等の待ち時間等、ちょっとした暇つぶしにしか読まない。こういった時に読む本は、決まって自分に関係のある専門誌や、興味をもったものしか読まない。つまり、人によっては、推理小説、ドキュメント、伝記随筆等、その人が興味をもった一ジャンルに絞られる事が多い。この様な読書は、本当にただの暇つぶしに終わってしまい、自分の情報網を広げられないのではないかと思う。こういった時に、色々な種類の本を読む人は、確かにTV等で知識を得るより、自分なりの本当の知識を得ているのではないだろうか？ この事は、

建築を学んでいる自分達の知識を得る方法と比較する事が出来る。我々建築を学ぶ人間にとって建物を見る事が知識を得る方法の一つであり、大切な事である。それを残すために写真に撮ったりするのである。しかし、写真よりスケッチした方がよいとされている。明確に残したいなら写真を上回るものはないが、我々の建物を見る目的はあくまでも知識を得て、自分自身のプラスにするという事である。ゆえに、スケッチの方が写真に撮るより、手間も時間もおかかるしどんな特徴を強く感じるか等頭も使う。しかし、こうした方が、より細かくまで集中して見なければならないし、自分なりに感じるものがあるわけで、これは人によって違うものであり、それが個人それぞれの知識になるのである。

本によって知識、情報を得る事は、全くこれと一緒にではないだろうか。

ただ皆と同じ事を漠然と得るTVによる知識より、頭をつかい、自分なりに考え想像し、人それぞれの感じ方がある。本から得る知識の方が、より自分のものになるのではないかという結論に達したわけである。

確かに興味のない本を読書感想文等でいやいや読むのはつらい事だと思う。いやいや読むものは、その本を読んでいるうちに、始めの方にどんな事が書いてあったか、分からなくなる事すらある。だからいやいや読まなくていい様に、日頃から読書の範囲を広げて、どんな種類のものにも興味をもつ様にな



葉虫

(by 4M 古本浩祥)

ればいいと思う。どんな事でも「知りたい、／＼」という気持ちがあれば興味が湧くし、本を読む事により色々な事がわかっていくと、読書が面白くなるはずである。

電車、バス等の待ち時間等のちょっとした暇に読めるという、持ち運びの良さの利点について、まず暇つぶしでいいから、色々な本を読んでみるのが一番だと思う。興味を持ったものから読書する事を始め、徐々に範囲を広げていけばいいのではないだろうか？ 本を好きになる、読書を好きになる事が大切ではないだろうか。それがどんな本であっても、読んで損をするという事はまずないと思う。かならず役に立つと思う。

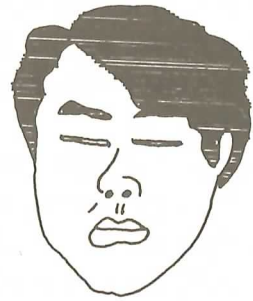
色々な本を読む人は、やはり色々な事を知っているし、話しも上手である。話題の豊富な人は、女性からも男性からも、もてるものである。

又、話す事は別として、文章を書く事を、苦手とする人が増えているのも事実である。これも本を読まなくなった事に関係しているのではないだろうか。本を読む人は、読まない人に比べて、表現力が豊かで漢字や熟語等もよく知っている。この事は、文章を書く基本になる事である。この基本の有無は、文章を書く自信の有無につながり、自信のある人は、どんどん文章を書いて、表現力を得るだろうし、自信のない人は、頭で思った事をうまく文章に出来ないわけであり、何かと文を書く事を避けて、結局、進歩しないという事になりかねない。皆が皆、こうだとは思わないが、文章を書く自信を持つには、表現力を豊かにする事がまず一番であり、その表現力を豊かにする方法は色々あるが、その中でも読書は身近で、手取り早く、最適な方法ではないかと思う。

以上の様に小さな悩みを解決するために、読書について考えてきた。結果は、唯一、文字を書ける動物として、どうせなら、文章をうまく書ける様になりたいと思うし、表現力を豊かにするために、まず、暇つぶしでいいから、色々な種類の本を読み、自分なりに理解し、自分なりに考え、自分自身の本当の知識にしたいという事になりました。

漫画の読み方

建築学科教官 西 名 大 作



(by 5 A 林 健次郎)

図書便りに、漫画について書くなど、余り誉められたことではないかも知れない。「何だこのタイトルは、こんな文章を書かれたら、ただでさえ本を読まない学生が多いのに漫画を読んでも良いですよとお墨付きをくれてやるようなもんじゃないか」と眉をしかめる先生方も多々いらっしゃるのではないかと思う。まあ、私がこういう心配をするのも、漫画というものが国語教育や読書習慣を妨害する邪魔物として一般に認識されている（と私は思っている）からである。

実を言うと私は、物心ついたときから漫画を読み始め、中学・高校・大学を通じて漫画研究会に身を置いてきた。そして、自ら漫画の擁護者たらんと志し、両親や教師の批判の舌鋒の矢面にあって立ち、ことあるごとに反論してきた経緯がある。それゆえ、個人的には漫画に対してあまり否定的な立場をとりたくはないし、とるつもりもなかった。

ところが、今年4月からここ呉高専に赴任して学生諸君を指導する身となり、一応そういう立場から皆の漫画に対する接し方を見ている内に、国語教育や読書習慣の邪魔物とまで言うつもりはないにしろ、あまり好ましい状態ではないと次第に思えてきたのである。

まだ高々半年の短期間に過ぎないのだが、それに

しても思うのは、皆予想以上によく漫画を読んでいるなあということ。それも実に堂々としている。担当授業と教官室の配置の関係で、専ら建築学科の高学年との付き合いしかないのだけれど、昼食時に教室で弁当を食べながら、その傍らに漫画をおいている学生もいれば、卒業研究の学生が教官室に持ち込んでいたりする。授業中膝の上に乘せている剛の者もいる。他の学科や低学年ではどうなのか知らないが、宿直で寮内を見回るとあちこちの部屋で散見するので、少なくとも建築学科の高学年が特別にひどいわけでもなさそうである。

授業中は別として、漫画を読むこと自体を否定しようとは思わない。問題とすべきは漫画の読み方である。ちょっと暇が出来ると、なんとなく手を伸ばしてそこら辺にある漫画雑誌を手にとり、おもむろに読み始める。そのあたりのプロセスが全く機械的・習慣的で、黙々とページをめくっていく。あまり肩肘張って構えて読むものでもないのだが、腰を落着けて読んでいる学生は少なく、専ら暇つぶしの道具にしている様子。どうも見ていて感銘を受けているように思えない。内容について友達同士で話すことも少ないように見える。

これは私の個人的な観察だから実際は違うのかも知れないが、もし、与えられたものを取り留めもなく受動的に享受しているだけであれば、非常に残念な事態であると言えるだろう。

漫画との付き合い方がこんな風になるのは、今の漫画の供給のされ方にその一因があると考えられる。ほとんどの漫画は週刊・月刊雑誌に連載されているのだが、それら雑誌の編集方針は、商業誌として成立する必要性から、大部数を大量にさばくことのみを考えていると言って過言ではない。

週刊少年ジャンプという雑誌がある。現在最もよく売れている漫画雑誌であり、毎週の発行部数450万部を誇る怪物雑誌である。あの天下の朝日新聞（朝刊）が800万部なのであるから、いかに巨大な数字であるかがわかる。週刊少年ジャンプはまた、この大部数を維持するため、非常に明確な編集方針を持っているということでも有名である。その一部を披露すると以下の如くだ。

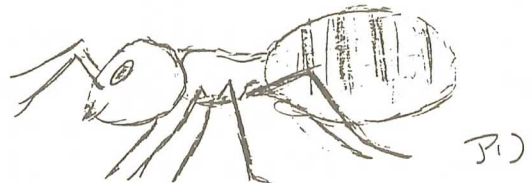
すなわち、多くの少年が嗜好する正義と友情を雑誌のメインテーマとして掲げ、表現手法と状況設定

によって新規性を出しただけのほとんど同一のストーリーと言っても良いような作品群を掲載する。作品の打ち切りや継続はすべて読者からのアンケートによる人気の有無によって決定する。売れている作品は話の盛り上がりや区切りも関係なしに1回でも長く続けさせ、人気がなければ新連載も10週間で打ち切りである（漫画の単行本1冊が丁度連載10週間分なのである）。

作者の主張やストーリーの起伏以前に、人気の有無や出版社の都合が優先するのだ。こういう状態は少年ジャンプだけの特殊事情ではない。多くの雑誌が大なり小なりこういう編集方針をとっている。少年ジャンプは若干それが明確なだけに過ぎない。

圧倒的多数の受取手に対して、売れる（皮相的に好まれる）作品のみを供給し、売れない作品は一切供給しない、この構図はTV番組とその視聴者の関係に酷似する。視聴率が高ければいいという思想で連続的に送られる番組を、大した感慨もなく、ながら的にだらだらと受容する。こういったTV視聴の悪しき慣習がそのまま漫画という媒体についても持ち込まれているのではないか。

TVが、1世帯に1台は必ずあるのと同様に、現在の漫画雑誌の大量供給は、手を伸ばせば届くところに漫画があるという状況を生んだ。暇なとき、手持ち無沙汰なときTVのスイッチを入れる、それと全く同様にあちこちにころがっている雑誌を手にとり、どれからということもなく読んでしまうのだ。



（ by 4E 河野英隆 ）

商業主義に徹した供給側の体制に慣らされてしまった受取手側の悪しき慣習。そのプロトタイプを学生の皆が漫画と接する姿の中に見たような気がする。考えてみると、それが当世のごく一般的な情景なのかも知れないのだが、やはり目の当たりにすると少なからずショックを受け、こんな状態ではいかんとの思いを強くしたのである。

今の漫画雑誌というのは描き手が真に伝えたい内容を作品として発表するにはあまりに劣悪な媒体である。漫画家は人気が出なければ掲載してもらえないから、また、連載すればするほど印税収入が増えるため、どうしても大衆迎合的な作品を量産する傾向になる。

しかし、そういう雑誌や漫画家の中にも、商業主義とうまく折り合いをつけて、自分なりのメッセージを発信してくれる漫画家や、多くの感銘を与えてくれる作品が少数ではあるが存在するのだ。

だが、悪貨は良貨を駆逐するのたとえがあるように、受取手である側が半分寝ているような鈍麻した感覚で刹那的な刺激を求めているような、そんな状況が今後も続けば、せっかくの作品も他と識別されず、良心的な漫画家を自ら葬り去ってしまうことにつながる。

表現技法や今様の感覚・フィーリングが合うからといった理由だけで読みやすい安易な漫画を求めたり、垂れ流し的に供給される全てを見境もなく片端から受け取ってはいけな。暇だからといって費やす時間もトータルすればいかに大きいことか。思索や懊悩、創造や空想に向けるべき貴重な時間を空費するだけで終わらず、感受性さえ摩耗させかねない。

石ばかりが目立つ玉石混淆の中から、自分が心から感銘を受ける、そういう漫画家や作品を探しだし大事にして欲しい。作品を厳選するという行為には鋭敏な感覚と批判的な見方が要求され、また、多くの情報を判断材料とせねばならない。それは自身の向上・発見につながるだけでなく、結果をはっきりと意志表明することにより、供給側の状況を改善する大きな原動力となるはずだ。何もせずとも受け取れる情報のみでなく、積極的に自分の門戸を解放し、世界を広げ、多くの作品に接することが重要なのである。

さらに、自身の精神的な成長に従い、漫画という枠を越えた様々な情報の必要性が増加する。漫画と他の媒体との比較の中から、漫画の抱える大きな可能性も理解されるだろうし、逆にどうにもならない限界も浮き彫りにされてくるはずだ、そこまでの認識に到達できればもうすぐ、漫画より余程広大な書籍の世界が一層の魅力を伴って眼前に現れてくるとだろう。

○「図書室では静粛に」

○「読んだ本はもとの位置へ」

○「帯出期間を守ろう」

○「図書室での飲食はやめよう」



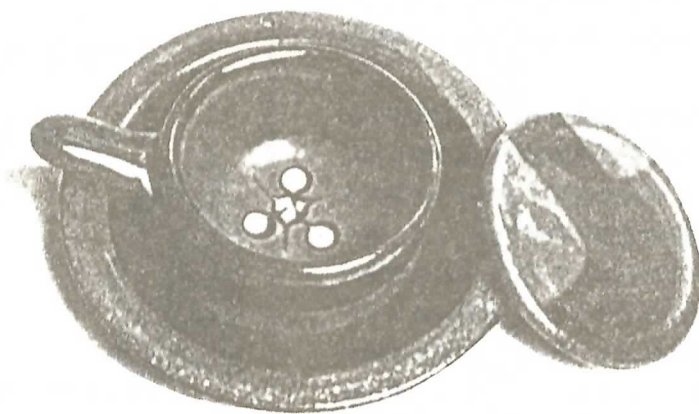
窯 場 め ぐ り

山陰の窯場を訪ねて(三)

一般科目教官 枡 本 紘 二

温泉津より60km余りR9を東に走ると出雲市に入るが、途中三瓶山の美しい姿が右手に見えて来ると大田市へと近づく。市内には延里窯や小姫窯があるものの、次回の旅に残しておくことにした。今回は玉造へ直行である。多岐町を通り抜けて出雲市の市街地を進む。国道に沿って東西に発達した街は信号が多く、通過するまでかなりの時間を要した。斐伊川を渡ってしばらく進むと、左手前方に宍道湖が目に入って来た。青く澄んだ湖水とは言えない少し濁りを感じさせる湖面である。山陰地方の特徴であるどんよりとした空模様のせいであろう。ここより玉造温泉までは10km程である。玉湯川西岸に玉造温泉と大きく書かれたシンボルタワーを右に折れて行けば温泉街である。橋を渡って急ぐに右に折れて進み、JR山陰線の玉造温泉駅に出た。この駅の左隣

りにあるのが湯町焼の窯元である。この窯は大正十一年の開窯で古くはないが、今では残り少なくなっている登り窯を使用して、所謂、民芸調の作品を多く焼いている。「湯町窯の特色は、出雲焼独特の黄、緑、白、黒の落ち着いた中にもあざやかな色調を放つ釉薬と、この窯を訪ずれた英国人バーナード・リーチ氏（日本の民芸運動を指導し、大きな影響を及ぼした）によって伝えられたスリップ・ウェアの手法による模様である」と、二代目陶主の福門秀士のお話であった。ポテポテ茶碗のようなこの地方独特の様式の中に、洋文様が和風な形に調和した器が所狭しと展示されている。その中でピッチャーとエッグ・ベーカーが目に入った。鉄分を多く含む赤い土に白化粧土で装い、その上から更に黄釉をかけて焼き上げられていた。エッグ・ベーカーは英国風陶技を学んだ陶主の自慢の作品のようである。私もこの種のものは今まで見たこともなかった。（ここ三、四年の間に他の窯でもよく似たものを焼き出している。）このエッグ・ベーカーは直火で暖めてもわれず、半熟卵が上手に出来るのである。使い方を次のように記しているので紹介したい。「器をガス、電熱、



エッグ・ベーカー

炭火に直接かける（余り強火でないこと）。熱くなってきたら、油を小さじ半分かバターひとかけとかし、器にいきわたったら、卵一個をわりこむ。そのまましばらくすると、卵の白身は底からまわりへと、白く固まってきて、黄身がまだ変わらぬうちに火を止める。それを受け皿にとって、調味料を加え、食卓に整える頃には、余熱で黄身は半熟になっている」と。車で来ているので荷物になることの心配はない。目にとまったピッチャーと、エッグ・ベーカーは四つ買い求めた。後日、試してみたが、紹介にあった通りの美味しい半熟卵が出来上がった。少しだし汁を入れた温泉卵風にしたのもなかなかよかった。のぼせて何日も続けたものであった。辺りも薄暗くなって来たので、今日の宿は玉造温泉と決めて川に沿って車を進める。温泉街に少し入った数えて三つ目の橋のたもとに呼び込みの人が立っている。そこまで来ると案の定、「お泊まりはお決めて」と近寄って来る。「お願いします」と言うと、「後から付いて来てください」と。案内された宿は鶴の湯であった。車を降りてフロントで料金の交渉、安い部屋に決めて通された所はまあまあであった。もしどこも一杯で行く先々で断られていたら、と思って安心したのか疲れが出て来た。先に食事を取り、ゆっくりと温泉につかった。翌朝、温泉街を抜けて少し山に向かって入った所にある出雲玉作資料館を訪ねてみた。古代の人がどのようにしてめのうからあの美しい勾玉に磨いて作ったか、その工程が分かりやすく展示説明されていた。緑色のめのうはこの地方だけに産出するものであるが、焼物に緑色の釉薬が多いのも何か結び付きがあるのかも知れない。30分程で資料館を後にし、もと来た道をR9まで出た。宍道湖を左手に見ながら嫁ヶ島が遠くに見える辺りまで来ると、布志名焼雲善窯と大きく書いた家があった。国道の⑩エリアに車を止めて、裏口から訪ねてみたが留守のようであった。布志名焼には三つの窯元があって、その一つに舟木研児氏の陶房があるが、日本でも有名な陶芸作家の一人である氏を訪ねるには、何か恐れ多い感じもあって足が遠ざかってしまった。小さく見えていた嫁ヶ島が次第に大きく見えて来るにつれて松江の市街地が近づいて来た。宍道湖大橋を渡って松江城下の駐^{した}車場に車を入れた。国宝松江城には以前登ったことがあったので、その折

りに訪ねて印象に残っていた武家屋敷、八雲記念館、新しく開館した田部美術館辺りを散策した。昼時近く、ご自由にお入りくださいと札の懸かったそば処での昼食と決めた。好物の割り子そばを注文した。白い信州そばよりも色黒の出雲そばの方が私は好きである。池には1m近くにも成長した黄金、錦、ドイツ鯉が澄んだ水の中を、ゆったりとした気分で泳いでいた。駐車場の向こうにある物産館に入ってみた。中には島根の名産品が一堂に並べられて即売されているので観光客には好評のようである。めのう細工、出雲和紙、灯ろう、出雲塗り、雲州そろばん、老舗の和菓子など、もちろん県下に70近くもある窯元の焼物が窯元別に展示されている。それらの中で特に一つの皿が目についた。方円窯の作品であった。半乾きの上に黒釉を掛け、手慣れた手法で秋草を削り取り、その上から少し白濁した透明釉を掛けて本焼きしたものと同推測された。気に入って、五枚にセットしようとしたが、揃いにするには二枚程納得がいかない。方円窯に同じものがありはしないかと思い、受付の人に頼んで直接窯元に電話してもらった。ありますとの返事と道順をも知らせ頂き松江市を後にした。方円窯は足立美術館を通り過ぎた大部奥に所在するようであった。松江から安来市までは20km余り、近道をしようと途中荒島駅の所で右折し、ほぼ直線に近い農道を一気に南下して走らせていると、まもなく鷺の湯温泉、足立美術館のそばまで来ていた。ここから3km程進んだであろうか、右手に八幡焼^{はちまん}の案内板が見えた。道草にはなるが訪ねてみることにした。手入れの行き届いた前庭を持った一棟の展示室があった。足立美術館への訪問者がここまで足を延ばして見学に来るのであろうか。中に入ると私一人である。しばらく見ていると、七十才位の陶主が出て来られた。青、緑釉を中心に辰砂の赤もあざやかであった。奥の陳列棚の一つの木葉天目茶碗が飾ってあった。色々な葉で試した末にやっと成功したとのことで、茶碗の黒い底に白く鮮明に葉脈が浮かび上がって焼成されている。これは売り物ではないとお話。是非とも知りたかったのであるが、何の木の葉か教えてはもらえなかった。所謂、企業秘密なのであろう。勾玉の形に作られた赤と緑の水滴をそれぞれ一個求め、先を急いだ。7km程走り、能義郡広瀬町下山佐須谷に所在する方円窯

にやっと到着した。前もっての電話で、私を待っておられた様子でこちらとしては大変恐縮した。早速に例の皿を見せて頂き、五枚セットを求めることが出来た。陶主は昭和24年生まれの若い亀屋志郎氏である。氏は東南アジアで焼物を学び、日本では志野焼の窯元で修業されたとのことである。なる程、秋草文様はすぐれているはずである。陶主は、所謂、脱サラで、建築科を卒業されて一時は建築会社勤めをしておられたそうである。私が呉から来た旨をお話すると、陶主も広交差点近くの某会社に勤めていた頃があったとかで、何かしらお互いに親しみが出て来た。陶主の母親らしき方が持って来られた茶菓子を頂きながら話が弾んでいった。帰り際にお土産にとコーヒークップをプレゼントされて嬉しくなり、厚く厚くお礼を申し上げて別れを告げた。往路とは違う安来市に出る道を選び、途中清水寺を訪ねてみ

た。こんな場所にと思える程、堂々たる伽藍である。境内をゆっくりと歩いて行くと、名茶室の古門堂、巖松軒、根本堂、三重塔が建っている。この三重塔は珍しく内部まで入ることが出来た。一つ目の階段の反対側に二つ目の階段があるので、真っ暗な内部をそれこそ手探りで次の階段を見つけては上って行くのである。急で狭い階段をやっとの思いで、三層の踊り場に出られた。ここに立って薄暗くなった境内を見下ろしていると、今にも空の方にだんだんと自分が上って行っているような気持ちになった。境内には名物の精進料理を食べさせてくれる店が何軒かあるが、予約無しで飛び入りでも馳走に与れるのが大変良い。その内の一軒に入り、早い夕食のつもりで頂いた。辺りもう暗くなった頃、帰路に着いた。



湯 町 窯

海外だより

夏のヨーロッパ旅行

一般科目教官 岩 根 三 邦

今宵の宿や如何? 昨年度ドイツ留学中、マインツ大学の夏休みの間に、オーストリア・スイス・フランス・スペインの4ヶ国を旅する機会に恵まれた。図書委員会の求めに応じ、ホテル事情を軸に思い出の一部を寄稿する。

旅行中、否、旅に出る前から私の頭を悩ませたのは、何といっても旅先での宿のことだった。その時点で既に4ヶ月を経過していたドイツ国内ならまだしも、誰一人知る人として無い、初めて訪ねる国ばかりなのである。それもひとり旅とくれば、不安はいやが上にも増し、これからの旅が苦行のようにも思えたものだ。

「只一日の願ひ二つのみ。今宵よき宿借らん、草鞋^{わらじ}のわが足に宜しきを求めんと計りは、いさゝかの思ひなり」とは、ひたすら旅に明け暮れた芭蕉の述懐であるが、現代においても、旅する人の心にかかることは変わらないものである。ただし、草鞋ではなく、愛用のテニスシューズを私は持参したのではあるが。

“神のまなざしホテル” 7月24日夏学期最後の講義を聴いた後、帰宅して明日のウィーン出発の準備をする。トランクに荷物を詰めながら、あれやこれやと不安に襲われ、久しく忘れていたドイツ到着直後のような「胃の痛み」を覚え、これからの旅を案ずる。

翌朝小雨の中、フランクフルト空港からルフトハンザ機で1時間半、隣席のドイツ人夫婦(偶然にも息子さんがマインツ大学の学生だった)と雑談したり機内食やワインを楽しんでいるうちに、質素でこじんまりしたウィーン(シュヴェヒャート)空港に到着。何もわからずうろうろしているとホテルの客引きに掴まったが、「高い」と断わり、ツーリスト

インフォメーション(Tourist Information 旅行者のための観光案内所で、ホテルの斡旋・予約等もしてくれることが多い)の窓口で市内地図 Stadtplan とホテルリスト Hotelverzeichnis をもらい、バスで City Air Terminal へ。この空港のインフォメーションでは、私の期待に反して、ホテルの斡旋まではやってくれなかったのである。



ウィーン西駅にて(オーストリア)

ところが、30分位で着いた所は City Air Terminal とは名ばかりで、何と Hilton Hotel の玄関ではないか。こんな高級ホテルに泊まれる筈も無く、重いバッグを肩に33キロのトランクを前に途方に暮れる。汗は出るし喉はかわいてくるしで、遂には最後の手段。通りがかりの人に事情を話し、「私はどうするべきや」を尋ねる。どうやら、もっと町の中心カールスプラッツの地下にあるインフォメーションで相談するのがよいとのこと。親切にもその婦人は、最寄りの電車の乗り場まで案内してくれたが、そこに居合わせた青年達は「タクシーの方がよい」と言い出す始末。夏のき中トランクを押して、またヒルトン・ホテルまで引き返し、タクシーでやっとカールスプラッツへ辿り着く。

地下のインフォメーション窓口の列に加わり、こちらの希望をいって紹介してもらったのが、見出しの安ホテル Hotel Auge Gottes である。ツインの部屋だが、料金はシングルでよいとのこと、シャワー・トイレ共同(無料)、朝食付きで1泊 290 AS (オーストリア・シリング、1 AS=12円)だった。

7月から9月のみオープン of 多少特殊なホテルとはいえ、一国の首都内でこの料金、私は大いに満足し、その分夕食を豪華にしたものである。

“黄金のライオン旅館” これに味を占め、インスブルックでは全く自分ひとりで宿を捜してみた。ウィーン西駅から特急で5時間半、チロルの山とイン川に囲まれ、二度の冬季オリンピック開催地として知られるこの小さな都市に着いて、まず、駅のインフォメーションで市内地図（ここでは有料）とホテルリストを手に入れる。次に、場所と料金をと勘案して、候補を二、三絞る。マツダのタクシーで最初に訪ねたのが、見出しの Gasthaus Goldener Löve（ガストハウスとは、飲食店も兼ねた宿屋・旅館）であるが、これもまたうまくいった。インスブルックの名物「黄金の小屋根」（ハプスブルク家の権力を示す意味で、1500年金貨を張り合わせるなどして作られたバルコニーの小さな屋根）もすぐそばで、夜毎その下で奏でられるチロルの民族音楽が4階の部屋まで飛び込んでくる程の、正に街のど真中に位置していた。それに、2階は味の悪くないレストランになっており、とても便利だった。これで、朝食付4泊の代金が、ウィーンで買った少し上等のチロリアンハット1個の値段より安いのであるから、宿は日本の旅行業者に任せないで、現地に行って自分で捜すべきだ。

連泊した御蔭で“Club Innsbruck”の会員カードをガストハウスの主人に発行してもらったが、美術館・ロープウェー等でかなりの割引が利き、大いに役立ったものである。

我が目を疑う事件 インスブルック滞在中、エッツタール（チロル地方で最も大きく深い谷の1つ）に入り、チロルの山と緑を満喫した夢見ごっこも束の間、次の訪問国スイスのジュネーブ中央駅で目の覚めるような事件に遭遇してしまった。

空港から鉄道でジュネーブ駅に向い、構内の一隅にあるツーリストインフォメーションでいつものように情報を手に入れホテルを予約するべく、ガラスで囲まれたオフィス内の列に並ぶ。必要な物だけを手にし、重いトランクと革のショルダーバッグを3、4メートル離れた部屋の隅に置き、念のため10秒くらいの間隔で目をやる。次第に列も短くなり、もう2人で自分の番という時、改めて荷物の上に視線を

落とすと、何とバッグの方が無いのである。初めは文字通り、我が目を疑った。次に、一旦故意に目を逸らし、目を擦ってもう一度注視したが、やはり無いものは無いのである。イタリアは危ないとは聞いていたが、まさかスイスで、しかも一応ガラスで仕切られた部屋の中で、ほんの10秒程の間に盗られるとは?! 前日にもインド人が大金をやられたらしいが、これで、カメラなど金目の品と、お金には換えられない住所録などの貴重品を一瞬にして失ってしまった。ただ幸いにも、パスポート・トラベラーズチェック・航空券は、いつも肌身離さず大事に首からぶら下げていたので無事だった。

反省1 ヨーロッパの大都市や空港では、手から離れたものは盗られても仕方無いと思え。

反省2 住所録は必ずコピーをつくっておこう。



レマン湖に浮かぶシヨンの古城（スイス）

1,700円のラーメン ジュネーブでもう1つ驚いたのは物価の高さである。ホテルにしても、市内ではどこを捜しても1万円以下の所は無いとインフォメーションではっきりいわれ、盗難に遭った分を少しでも取り戻すべく私は、急行で1つ隣の町ニヨンに宿を求めた程である。そこで一番安いホテルを紹介してもらったが、それでもウィーンの倍はしたのである。

また、ジュネーブ駅のすぐ前に「ラーメン」という懐かしい文字を見つけ、値段をよく確かめもせず、つい食べてしまったが、これが何と17 SF（スイスフラン）もしたのである。ヨーロッパに永い人の話では、「物価の高いスイスで稼ぎ、安いスペインやギリシアで遊ぶのが最高」なのだそうである。

パリの安ホテル その後モン・ブランやマッターホルンの偉容に感嘆し、シヨンの古城に宗教改革者

ボニヴァールを偲んでスイス航空の機上の人となる。厚かましくもウィングラスを記念に所望し、近代的なド・ゴール空港に着いたのはよいが、この時ほど情無い心境の時は無かった。フランス語はできない上に、頼りの綱の日本語案内書は、盗られたバッグの中だったからである。しばらく途方に暮れ、空港ビルの中をうろついた後、日本航空のカウンターに泣き付いた。

ここで凱旋門の近く、シャンゼリゼ127番の「フランス政府観光局案内所」を教えてもらい、そこで世話してもらったのがHotel De Franceである。名前は大袈裟だが、古い汚いホテルで、ベッドと机の他にはシャワーもトイレも無く、おまけに床は、本校のかつての2寮のように傾いていて、日記を付けるのにも苦労したが、何故かビデは付いていた。それにマダムといったら、ドイツ語は通ぜず、何とか英語で喋ってもフランス語でしか返ってこないものである。しかし、食事無しで1日2,000円余りなのだから文句もいえない。それにしても、排水は悪いし、洗面台の水は漏るし、ひどいホテルだった。



ローランギャロのテニスコート（フランス）

フランス人の判官びいき パリの裏通りの、悪臭漂う汚さと、ルーブルやヴェルサイユの観光客の多さにうんざりして、一日をブローニュの森に遊ぶ。

森といっても、自動車道・遊歩道が整備され、日本の公園や林の雰囲気、とにかく広い。東京羽田空港の二倍以上あるらしい。ジョギングの人、日光浴・ボートやペタंकに興ずる人を横目に、ひたすら歩き1時間以上掛かってこの森を縦断し、Roland-Garrosのテニスコートに出る。ちょうど大会が開かれていたので、25フランを払って中に入り、半日試合を見物したが、そこで面白い光景に出会った。

美人で強烈なフォアを持つフランス女性と、決めた手に欠ける黒人女性がシングルスを戦っているのだが、観客の多くが、男も女も、どうも弱い方に声援を送っているのである。はにかみの表情をみせながら、ただひたすら相手の球を拾い続け、相手のミスによって遂に彼女が勝利を手にした瞬間にあがる拍手と歓声。それに応えて、選手の方も観客に頭をペコリ。一段と高まる拍手と歓声。

アンツーカーのコートにすすすがしさが流れ、私はビールで祝福した。

異国で偲ぶ母 「ピレネーの向こうはアフリカ」とナポレオンは言ったそうだが、事実ピレネー山脈を越えると風土は一変する。エール・フランス機の窓から見下ろす海の色はグリーン味を帯び、大地は逆に緑まばらな乾いた茶色となる。

マドリッドの市心から約18kmのバラハス空港に着陸後、大分慣れてきて、要領よくホテルを予約する。スペインは物価が安いので、バス・トイレ付きのいつもより高級なホテルにしてみる。一番の目抜き通りグラン・ビアからプエルタ・デル・ソル（太陽の門）寄りに1つ入った所に位置して何かと便利で、市内の観光にはすべて徒歩で間に合った。

ある日王宮に向かう途中、マヨール広場の南の路上にだらしなく膝を組み、大きな瓶から直接ビーノ（ブドウ酒）を飲んでいる物乞い風の老婆を目にし、何故か母を思い出した。小柄で地味な服、哀愁を帯びた瞳がそうさせたのかもしれない。

ヨーロッパ随一の広さを誇るものの1つといわれる王宮の前で、またその先のサバティーニ庭園の赤松の林の中で、熱いものが込み上げてくるのを私は押えることができなかった。

反省3 親孝行したいときには親はなし。



ガウディのカサ・ミラ（スペイン）

図書館を訪ねて

広島大学附属図書館西条分館 を訪ねて

図書係長 土 佐 智 義

阿賀からバスでおおよそ50分、緑に囲まれた賀茂学園キャンパスに広島大学附属図書館西条分館（以下「西条分館」という。）を訪ねた。冷房がよく効いた閲覧室には、夏季休業中にもかかわらず留学生を含む多くの利用者が熱心に机に向かっておられた。授業期には1日平均500人の入館者があるとのことである。雑音に感わされることのない個室12席を含め、約240の座席と1階の離れにテレビや囲碁、将棋の備わった談話室、2階の玄関部分に新聞・雑誌を自由に読むことのできるブラウジングルームを設け、利用者がリラックスした雰囲気の中で学習や研究ができるように工夫されている。

西条分館は昭和57年6月に総工費5億2千万円をかけて竣工し、同年9月工学部分館として開館、昭和63年4月に生物生産学部が移転して複合分館として発足し、今日に至っている。将来は、広島大学の第2図書館（自然科学系図書館）としての機能を担う予定だそうである。

自然科学分野の特徴として、より新しい文献のより速い入手が求められるが、西条分館にはその手段として Chemical Abstracts や Biological Abstracts を始めとした貴重な2次資料（文献が主題ごとにまとめられたもので原著ではない）だけで約30種もある。さらに、日本科学技術情報センター（JICST）と契約した JOIS（JICST On-Line Information Service）検索、学内開発による BIOSIS（生命科学関係情報）検索等の情報検索サービスが拡充され、広島大学全体で和・洋合わせて約82万冊の最近の受け入れ図書や、約4万種に及ぶ学内所蔵雑誌の所蔵検索等の様々なサービスがたちどころにして受けられる。現在、強力に推進されている「学術情報システム」にも接続されており、居ながらにして、全国

の資料検索も可能となってきつつある。

学外者にも利用が許可されるので、本校の職員は言うまでもなく、学生も卒研・レポート等で足りない資料を補うために出かけてみてはいかがでしょうか。閲覧室だけで学習を中心とした学生向けの約2万冊の図書が整備されて利用を待っています。

研究に必要な資料の所蔵調査や文献の入手では本校は一方ならぬお世話になっているが、引用文献の記載事項に誤りがあれば、その文献調査に多大の時間を要して迷惑をおかけするので、文献複写の申し込みにあたってはなるべく正確に、且つ漏れなく記入して下さるようお願いいたします。

図書館の概要

1. 蔵書

① 図書	和書	136千冊
	洋書	101千冊
	計	237千冊

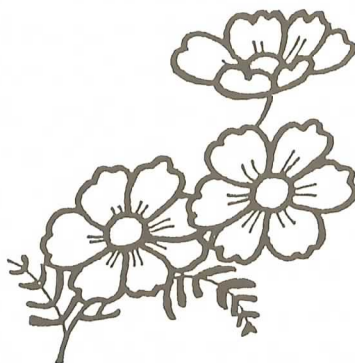
② 雑誌

（単位：種）

	和	洋	計
所蔵	4,912	2,751	7,663
受入	2,002	1,534	3,536

2. 利用対象者数

学 生	約 2,700 名
	（院生、留学生を含む）
教官職員	452 名
	（蔵書、利用対象者数とも2学部合計）



お知らせ

購入希望図書の申し込みについて

読みたい本が図書室に無い場合、カウンターに備え付けの「購入希望図書」申込書に必要事項を記入して、投書箱に投函してください。

最近、投書箱に蜘蛛の巣ができそうな気配で心配しています。せっかくの権利を有効に活かしてください。でも、あまりクダけた本はお断りします。呉高専に属する者にふさわしい本を推薦してください。

図書貸出方法の変更について

去る4月から、電算化により図書貸出方法が変更されましたが、中にはご存じない方が見受けられるので、改めてここにご紹介いたします。

図書を借りる時は「図書利用票」が必要です。又、「図書利用票」の交付を受けるには、身分証明書が必要です。以後はこの「図書利用票」を提示するだけで図書を借りることができます。

詳しくはカウンターで係員にお尋ねください。

図書の返却について

前の図書貸出方法の変更に伴い、貸出冊数のチェックが厳密になりました。以前のように、すぐ返すからと冊数オーバーで借れた昔が懐かしいなどと言わずに、不便でしょうが、制限冊数、期間を守ってください。機械は「情」を持っていません。正に、機械的に処理してくれますので、カウンターでの押問答が無くなり係員は大変助かっています。

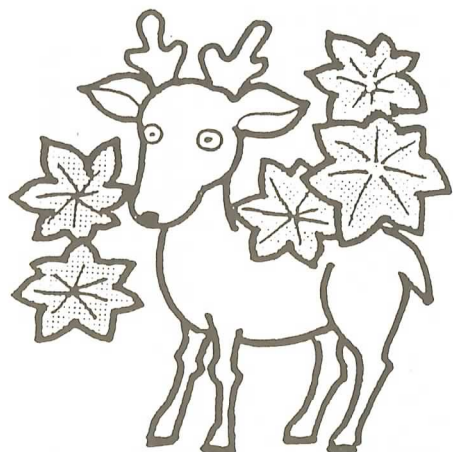
しかし、返した日に別の図書を借りる場合、借りる図書の冊数と返却した図書の冊数の合計が貸出制限冊数（通常、学生は3冊、卒研学生、教職員は5冊）を超えれば借りることが出来ない場合があるので、直接カウンターへ返却するように心がけてください。

返却 + 貸出 ≤ 制限冊数 (3 or 5)

→ ブックスポスト

返却 + 貸出 > 制限冊数 (3 or 5)

→ カウンター



新着図書案内

(昭和63年1月～8月受け入れ図書室備付分)

> 0 総 記 <

人工知能 (白鳥則郎等) 共立出版
 テレコム社会 (井上 宏) 講談社
 インテリジェント・ビルとは何か (小寺 利夫) 有斐閣
 コンピュータが狙われている (長沢 光男) プレジデント社
 計算機科学の基礎 (足立 暁生) オーム社
 計算機システム (阿江 忠) 〃
 計算機科学入門 (L. ゴールドシュレーガー等) 近代科学社
 CP/MとMS-DOS (鈴木 陽一) 共立出版
 ソフトウェア設計依頼の手引き (キャロリン・シャムリン) 啓学出版
 ソフトウェアの生産技法 (管野文友等) 日科技連出版社
 オペレーティングシステム (Raymond W. Turner) 丸善
 プログラミングの考えかた (土居竜久等) 岩波書店
 並列論理型言語GHCとその応用 (古川康一等編) 共立出版
 はじめて学ぶCOBOL (市川公士等) ナツメ社
 PASCAL 第3版 (K. イェンゼン等) 培風館
 COBOL プログラミング (大林 久人) 共立出版
 プログラム・フローチャート (〃) 〃
 コンピュータアルゴリズム事典 (奥村 晴彦) 技術評論社
 実習グラフィックス (佐藤 義雄) アスキー出版局
 入門グラフィックス (〃) 〃
 すぐ使えるLattice C / パーソナル (塚越一雄等) ナツメ社
 Lisp プログラミング (渡辺 宏) 共立出版
 図書館情報学ハンドブック 丸善
 豊かな青春を 広島県高等学校図書館協議会
 ブックページ '88 ブックページ刊行会
 ブリタニカ国際年鑑 1988 ティビーエス・ブリタニカ年鑑
 平凡社百科年鑑 1988 平凡社
 日本大百科全書 小学館
 20: ふーへか
 21: へきーます
 22: ませーもぬ
 23: もねーりこ
 朝日年鑑 1988年版 朝日新聞社
 中国年鑑 1988年版 中国新聞社
 事実とは何か (本多 勝一) 朝日新聞社

職業としてのジャーナリスト

(本多 勝一) 朝日新聞社
 朝日新聞の重要紙面でみる1985年～1987年 〃
 朝日選書 〃
 326: 現代世相探検学 (高田公理等)
 327: 親 戀 (真継 伸彦)
 328: 永久運動の夢 (アーサー・オードヒューム)
 329: 出口なお (安丸 良夫)
 330: 海道の社会史 (鶴見 良行)
 331: フランス革命200年 (河野 健二)
 332: 謡曲を読む (田代慶一郎)
 333: 江戸人の歴史意識 (野口 武彦)
 334: 昭和経済六〇年 (久保田晃等)
 335-336: 進化思想の歴史 上、下 (ピーター・J・ボウラー)
 337: 『武玉川』を楽しむ (神田 忙人)
 338: 人類の起源を探る (横山 祐之)
 339: 山中人閑話 増補 (加藤 周一)
 340: 風景と都市の美学 (内田 芳明)
 341: 生と死を支える (柏木 哲夫)
 342: 忘れ得ぬ俳句 (野見山朱鳥)
 343: ダーウィンをめぐる人々 (松永 俊男)
 344: 戦後芸能史物語 (朝日新聞学芸学部編)
 345: 西南役伝説 (石牟礼道子)
 346-347: 続百代の過客 上、下 (ドナルド・キーン)
 348: 川上音二郎 (松永 伍一)
 350: アメリカ「60年代」への旅 (越智道雄)
 351: 脳 (小出 五郎)
 352: タージ・マハル物語 (渡辺 建夫)
 353: 舞台・ベルリン (ルート・アンドレーアス＝フリードリッヒ)
 354: 関釜連絡船 (金 賛汀)
 355-356: 世界名作の旅 上、下 (朝日新聞社編)
 357: 都市はいかにつくられたか (鯖田豊之)
 358: 明治・青春の夢 (嶋岡 晨)
 岩波セミナーブックス
 24: ガルブレイスを読む (中村 達也) 岩波書店
 25: 法と社会の昭和史 (渡辺 洋三) 〃
 26: シェイクスピア伝説 (小津 次郎) 〃
 新訳漢文大系 明治書院
 62: 淮南子 下 (楠山 春樹)

> 1 哲 学 <

自分からの自由 (岩田 慶治) 講談社
 心理学雑学事典 (渋谷 昌三) 日本実業出版社
 ノストラダムスの大予言 スペシャル・日本編 (五島 勉) 祥伝社

「くやしき」の心理 (加藤 諦三) 三 笠 書 房
 心が疲れたとき読む本 (紀野 一義) PHP 研 究 所
 活 路 (真鍋 繁樹) 講 談 社
 釋尊の道 修訂 (小山 一行) 山 喜 房 佛 書 林
 人間存在の探求 (松木 真一) 創 元 社

> 2 歴 史 <

日本史もの知り事典 主婦と生活 社
 うめばし博士の逆・日本史 祥 伝 社
 4: 神話の時代・古墳→弥生→縄文

(樋口 清之)

「文藝春秋」にみる昭和史 文 藝 春 秋

1: 昭和元年～昭和20年

2: 昭和21年～昭和45年

3: 昭和46年～昭和62年

岩波ブックレット シリーズ昭和史 岩 波 書 店

2: 二・二六事件 (須崎 慎一)

7: 大東亜共栄圏 (小林 英夫)

8: 日本の敗戦 (荒井 信一)

12: ベトナム戦争と日本 (吉沢 南)

決定版 昭和史 1-18 毎 日 新 聞 社

古代ギリシア (エミール・ナック等) 佑 学 社

ポンペイの滅んだ日 (金子 史朗) 原 書 房

人物歳時記 (今泉 正顕) 小 学 館

人物日本の女性史 100話 (小石 房子) 立 風 書 房

武田信玄と曹操 (松本 一男) 新 人 物 往 来 社

瀬戸大橋をかけた男 (河口 栄二) 三 省 堂

ライナス・ポーリングの八十三年

(村田 晃) 共 立 出 版

朝日百科 世界の地理 1-12、別巻 朝 日 新 聞 社

角川日本地名大辞典 角 川 書 店

10: 群馬県

40: 福岡県

日本歴史地名大系 平 凡 社

34: 岡山県の地名

北海道探検記 (本多 勝一) 朝 日 新 聞 社

新東京百景 (山口 瞳) 新 潮 社

ドイツ生活事典 '87・'88年度

(田岡百合子) 白 馬 出 版

北欧物語 (一ノ瀬 昭) グラフィック社

> 3 社会科学 <

岩波ブックレット 岩 波 書 店

104: 地価はなぜ暴騰するか (渡辺洋三)

105: 直接税と間接税 (北野 弘久)

106: 町医者 of 戦後 (松田 道雄)

107: ワイダの世界 (アンジェイ・ワイダ等)

108: 日本社会と天皇制 (網野 善彦)

109: コンピュータと子どもの未来 (佐伯 胖等)

110: 新しい日米・日中を考える (國弘 正雄)

111: ことばづかいの昭和史 (寿岳 章子)

112: 飢餓と難民 (犬養 道子)

113: 私たちはいまどこにいるか (大江健三郎等)

114: さくら隊8月6日 (新藤 兼人)

115: 破壊される熱帯林

(地球の環境と開発を考える会)

116: 原爆被爆者の半世紀 (伊東 壮)

117: Dear Friends (落合 恵子)

118: 「国家秘密法」私たちはこう考える

(日本ペンクラブ編)

119: 消費税 (北野 弘久)

120: 核廃絶と世論の力

(長崎市核軍縮を求める二十二人委員会編)

88 朝鮮半島を読む (前田 康博) 教 育 社

中国人と日本人 (田中 興造) 日本経済通信社

ジキル博士のハイドを探せ (広瀬 隆) ダイヤモンド社

〔事典〕1990年代 日本の課題

(総合研究開発機構編) 三 省 堂

バカにつける薬 (呉 智英) 双 葉 社

三脱三創 (堺屋 太一) 祥 伝 社

事実の素顔 (柳田 邦男) 文 藝 春 秋

超西欧的まで (吉本 隆明) 弓 立 社

ペレストロイカ (M. ゴルバチョフ) 講 談 社

アパルトヘイト

(日本AALA連帯委員会編) 新 日 本 出 版 社

南アフリカの内側 (伊高 浩昭) サイマル出版会

21世紀「都市の時代」を読む

(都市政策研究会編) 鹿 島 出 版 会

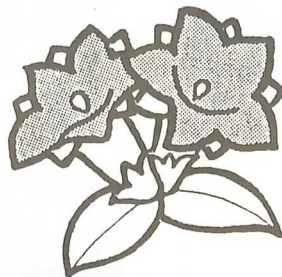
現代国際事情 (原正行編著) 北 樹 出 版

国際日本の将来を考えて (松本 重治) 朝 日 新 聞 社

超大国の回転木馬 (関場 誓子) サイマル出版会

核軍縮と平和 (中川 八洋) 中央公論社

法令用語の常識 第3版 (林 修三) 日本評論社



日常生活の法律全集 63年版 自由国民社
 六法全書 昭和63年版 有斐閣
 法令解釈の常識 第2版 (林 修三) 日本評論社
 憲法判例百選 1-2 第2版 有斐閣
 いいひさいちの経済外論

(いしい ひさいち等) 朝日新聞社
 日本経済の世界戦略

(長谷川慶太郎) グリーンアロー出版社
 経済白書 昭和63年版 (経済企画庁編) 大蔵省印刷局
 日本解剖 1-6 (NHK取材班等) 日本放送出版協会
 豊国論 (堺屋 太一) ネ ス コ
 孤独な巨人ニッポン

(クリスチャン・ソテール) 日本経済新聞社
 マンガ 日本経済入門 Part.4

(石ノ森章太郎) 日本経済新聞社
 業際化と情報化 (宮沢 健一) 有斐閣
 人を動かす 第2版 (D. カーネギー) 創元社
 20代の自己開発 (上田 敏晶) 日本能率協会
 円とドル (朝日新聞経済部編) 講談社
 円とドル50の常識 (岡三経済研究所) こう書房
 円とドル (吉野 俊彦) 日本放送出版協会
 日本国勢図会 1988年版

(矢野恒太郎記念会編) 国勢社
 社会学事典 (見田宗介等編) 弘文堂
 経済理論と都市 (J. V. ヘンダーソン)

勁草出版サービスセンター
 住まいの処方箋 (早川 和男) 情報センター出版局
 土地と住まいの思想 (") "
 人が動く企業が変わる (荒井敏由紀) 時事通信社
 賢い女の愚かな選択

(コーネル・コーワン等) 講談社
 塀の中の懲りない面々 2 (安部 謙二) 文藝春秋
 広島県震災史 (広島県編) 第一法規出版
 風よ祖国に向かえ (遠藤 誉) 読売新聞社
 教えることと学ぶこと (林 竹二等) 小学館
 やる気と自学を育てる教育 (平井 信義) 明治図書出版

「教育」わたしの体験から 朝日新聞社
 面白ゆるやか教育のすすめ (森 毅) 明治図書出版
 教育戯術 (村田 栄一) "
 青年心理学セミナー (関忠文等編) 福村出版
 アメリカの日本人生徒たち

(ジェニファー・ファークス等) 東京書籍
 京大史記 京都大学創立90周年記念協力出版委員会
 他人が見える教育 (樋口 恵子) 明治図書出版
 近代庶民生活誌 第6巻: 食・住 三一書房
 インドネシア民族文化 (佐藤多紀三) 雄山閣出版
 東京歳時記 小学館

1: 春
 2: 夏
 3: 秋
 4: 冬
 経済国防論 (長谷川慶太郎) ティビーエス・ブリタニカ
 呉子 (尾崎秀樹訳・解説) 教育社
 六韜 (林富士馬訳・解説) "
 三略 (真鍋呉夫訳・解説) "
 孫子 (中谷孝雄訳・解説) "

> 4 自然科学く

科学史 (山崎正勝等編著) 青木書店
 日本の自然 岩波書店

1: 火山と地震の国 (中村一明等)
 理科年表 昭和63年 (東京天文台編纂) 丸 善
 SISTハンドブック (科学技術庁科学技術振興局編)
 日本科学技術情報センター
 アシモフ博士のQ&A 100

(アイザック・アシモフ) 法政大学出版局
 チャート式代数・幾何 (橋本 純次) 数研出版
 数学がみえてくる (田村 二郎) 岩波書店
 楽しく学ぶ線型代数 (飯高 茂等) 紀伊國屋書店
 線形代数学の基礎 改訂版 (水本 久夫) 培風館
 数 (M. ラインズ) 岩波書店
 チャート式基礎解析 (橋本 純次) 数研出版
 チャート式微分・積分 (") "
 大学一年生の微積分 (住友 洸) 現代数学社
 ラプラス変換と常微分方程式 (布川 昊) 昭晃堂
 カオス力学系入門 (R. L. デバネー) 共立出版
 自然の数理と社会の数理2 (佐藤 總夫) 日本評論社
 図形と文化 (ダン・ペドウ) 法政大学出版局
 統計用語辞典 (芝 祐順等編) 新曜社
 推定と検定のはなし (養谷千鳳彦) 東京図書
 数値計算法 (小沢 一文) 共立出版
 圧縮性・粘性流体力学 (岩本順二郎) 東京電機大学出版局
 ショックウェイブ (Irvine Israel Glass) 丸 善
 光をはかる (照明学会編) 日本理工出版会



電気磁気学 (安達三郎等) 森北出版
超伝導セラミックス (長谷川安利等) 工業調査会
高専の化学 問題集 (笹本忠等編) 森北出版
ボクとママのサイエンス (斉藤満里子) 廣川書店
一般化学 (竹林 松二) 学術図書出版社
化学One Point 共立出版
22: 化学計測 (吉村忠与志)
溶液の化学 (大瀧 仁志) 大日本図書
風のはなし 1-2 (伊藤 学) 技報堂出版
気象のはなし 1-2 (光田寧編著) "
生命学への招待 (森岡 正博) 勁草書房
ゲル濾過法 第2版 (志村憲助等) 学会出版センター
蛋白質の定量法 第2版 (菅原 潔等) "
還元糖の定量法 (福井 作蔵) "
微生物の生態 "
2: 相互作用をめぐって(日本微生物生態学会編)
生物による環境浄化 (有馬啓等編) 東京大学出版会
藻類学総説 改訂版 (広瀬 弘幸) 内田老鶴園新社
藻類研究法 (西澤一俊等編) 共立出版
コケ (井上浩解説・写真) 東海大学出版会
電磁気と生体 (大森豊明編著) 日刊工業新聞社
浮気人類進化論 (竹内久美子) 晶文社
貝類 (奥谷喬司解説) 東海大学出版会
淡水魚 (林 公義等) "
からだ 河出書房新社
脳と人間と社会 (千葉 康則) 法政大学出版局
神谷美恵子著作集 みすず書房
3: こころの旅
5: 旅の手帖より
6: 存在の重み

> 5 工 学 <

表面測定技術とその応用 (河村末久等) 共立出版
センサと材料 (日本材料科学会編) 裳華房
振動工学概論 (明石 一) 共立出版
音響工学講座 コロナ社
3: 建築音響 (永田 穂等)
工業熱力学 (松永 省吾) 東京電機大学出版局
材料の力学 (岸田 敬三) 培風館
パソコンによる材料力学演習 (櫻井恵三) 槇書店
基礎材料力学 (竹園 茂男) 朝倉書店
計算材料科学 (堂山昌男等編) 海文堂出版
インテリジェントマテリアル (桜井靖久等) 日刊工業新聞社
新素材ハンドブック
(新素材ハンドブック編集委員会編) 丸善
CAD/CAM事例集 (日本機械学会編) 技報堂出版
CAEとCAM (") "

基礎教育 コンピュータ設計・製図 共立出版
1: CAD/CAMの基礎
2: CADの実際
コンピュータによる設計・生産・管理 (中島勝等編) 共立出版
超電導で「富士山」時代 (石井 威望) 文藝春秋
独創の狩人 (田原総一郎) 講談社
自然科学系(理・工・農・医)実用英和辞典 小倉書店
生産工学 (岩田一明等) コロナ社
コンピュータによる自動生産システム 共立出版
1: ハードウェア編 (橋本文雄等)
2: ソフトウェア編 (")
土木への序章 (田中 輝彦) 鹿島出版会
土木重要用語の解説 改訂増補版
(角江 登編) 理工図書
建設白書 昭和63年版 (建設省編) 大蔵省印刷局
土木技術のための小論文・技術レポートの書き方 (京牟礼和夫) 理工図書
土木重要計算問題集 (角江 登編) "
土木工学全集 "
第5巻: 土質力学 改訂版
新体系土木工学 技報堂出版
5: 連続体の力学 (白石成人等)
16: 土の力学 1 (嘉門雅史等)
41: 橋梁上部構造 1 (加藤正晴編著)
55: 都市計画 1 土地利用 (横山浩等)
海外交通プロジェクトの評価(土木学会編) 鹿島出版会
解説土質工学演習 (今野 誠等) 国民科学社
新示方書による土木材料実験法
(土木材料実験教育研究会編) 鹿島出版会
鉄筋コンクリート工学演習 改訂版
(岡田 清等) "

製図のかき方 土木学会
土木工事ののり面保護工 全訂新版
(新田伸三等) 鹿島出版会
道路工学 (巻上安爾等) 理工図書
道路の計画と設計 (武部健一編著) 技術書院



マンガ 青函トンネル(石ノ森章太郎)日本放送出版協会
瀬戸大橋全記録 山陽新聞社出版局
大鳴門橋

(本州四国連絡橋公団第一建設局編)海洋架橋調査会
土砂災害調査マニュアル

(松村和樹等編著)鹿島出版会
日本近代都市計画の百年(石田 頼房)自治体研究社
東京発・都市の現在(松葉 一清)駁々堂出版
ウォーターフロント再開発

(アメリカ合衆国商務省編)理工図書
水辺と都市(上田 篤等)学芸出版社
都市のウォーターフロント開発

(ダグラス・M・レン)鹿島出版会
歩車共存道路の計画・手法

(天野光三等編著)都市文化社
郊外住宅地の系譜(山口 廣編)鹿島出版会
環境科学への扉

(日本環境学会編集委員会編)有斐閣
21世紀の地球環境(高橋浩一郎等編著)日本放送出版協会
環境白書 昭和63年版(環境庁編)大蔵省印刷局
柳川の水よ、よみがえれ(光岡 明)講談社
ヒトと緑の空間(品田 穰)東海大学出版会
建築フレッシュマン講座(山田 修)学芸出版社
建築巡礼 丸 善

- 1: 荒野と開拓者(香山 壽夫)
- 3: 紺碧の幾何学(木島 安史)
- 4: ヨーロッパの民家(太田 邦夫)

現代建築を担う海外の建築家101人

(三宅理一等編)鹿島出版会
GA Architect A. D. A. EDITA ToKyo
8: Tadao Ando(二川幸夫編)

昭和生まれ関西の建築家50 日本建築家協会
場所の心理学(デイヴィッド・カンター)彰国社
明治少年記(藤島玄治郎)住まいの図書館出版局
空相の現代建築(藤井博巳等編)鹿島出版会
都市の遺伝子(毛綱 毅曠)青土社
木に学べ(西岡 常一)小学館
僕は、時計職人のように(高松 伸)

住まいの図書館出版局
建築再読の旅(若山 滋)彰国社
天の建築・地の住居(渡辺 豊和)人文書院
直前突破二級建築士 1988

(建築資格試験研究会編)学芸出版社
総覧日本の建築 新建築社

- 1: 北海道・東北(日本建築学会編)
- 3: 東京
- 5: 東海
- 9: 九州・沖縄

軽井沢別荘史(穴戸 實)住まいの図書館出版局

近代の見なおし 1960-1986

(東京国立近代美術館編)朝日新聞社
モダニズムの建築(向井 正也)ナカニシヤ出版
建築探偵東奔西走(藤森照信等)朝日新聞社
建築探偵の冒険 東京編(藤森 照信)筑摩書房
帝都復興せりノ(松葉 一清)平凡社
窓のはなし(日向 進)鹿島出版会
パソコンによる建築計画(岡田光正等)朝倉書店
パタン・ランゲージ(C. アレグサンダー等)鹿島出版会
図解ツーバイフォー建築の実務

(池田 邦吉)オーム社
大規模なオフィスビル(渡辺 明治)井上書院
幼稚園の基本設計(河野 通祐)〃
公民館・体育館(西日本工高建築連盟編)彰国社
病院建築の構成 増補改訂(小川健比子)鹿島出版会
建築計画チェックリスト宿泊施設 彰国社
内井昭蔵のディテール(内井 昭蔵)〃
インテリジェントビル設計計画用語事典

(NTT-IB研究会編)〃
「塔の家」白書(東 孝光等)住まいの図書館出版局
GA Houses 世界の住宅 22

(ウエイン藤井編)A. D. A. Edit Tokyo
GA Houses Special 〃

2: The Emerging generation in U. S. A.
住まいとほどよくつきあう(宮脇 檀)新潮社
三層住宅の本 住宅新報社
住まい考(三菱商事・住まい館等編)筑摩書房
併用住宅(西日本工高建築連盟編)彰国社
住宅のデザインと製図(三川 榮吉)〃
西澤文隆のディテール(西澤文隆等)〃
台所空間学(山口 昌伴)建築知識
光・熱・音・水・空気デザイン 彰国社
建築環境設備学(紀谷文樹等)〃
建築設備士試験直前突破テキスト オーム社
建築設備公式活用ブック(山田信亮等)〃
新訂・わかり易い設備工学講座 彰国社

2: 空気調和設備(吉村 武等)
3: 衛生設備(戸崎重弘等)
機械工学辞典(越後亮三等)朝倉書店
演習 機械の力学 東京電気大学出版局

1: 機械力学編 改訂(小山 十郎)
2: 材料力学編 〃(萩原 国雄)

ポイントを学ぶ材料力学(西村尚編著)丸 善
材料工学(P. N. ピーベル等)啓学出版
精密機素 2(板生 清)コロナ社
マイコンによる機械の制御 基礎編

(山口隆男等)昭晃堂
ベアリングのおはなし(綿林英一等)日本規格協会
CAD/CAM(市村 洋等)共立出版

要説機械製図 (大西 清)理工学社
 油空圧技術 (塩田泰仁等)産業図書
 工作機械の最先端技術(日本機械学会編)工業調査会
 内燃機関の潤滑 (染谷常雄等)幸書房
 電気基礎 上、下
 (電気基礎研究会編)東京電機大学出版局
 電気工学ハンドブック 新版 電気学会
 絵とき電気理論 (福田 務等)オー ム 社
 電気入門グラフィックス (福田 務) "
 ポイントマスター 電気 (牧野 秀雄) "
 フレッシュマンのための教養電気 上、下
 (宮入 庄太)東京電機大学出版局
 ポイントマスター 交流 (松尾 忠司)オー ム 社
 例題で学ぶ過渡現象 (大重 力等)森 北 出版
 交流回路の計算演習 第3版
 (浅井 吉弥)東京電機大学出版局
 電気磁気の計算演習 第2版(藤本 実) "
 電気数学 2 (家村 道雄)オー ム 社
 現代応用電気数学 (伊賀 健一) "
 絵とき電気理論の計算 (栗原 豊等) "
 ポイントマスター 直流 (坂本晴雄等) "
 原子力発電の諸問題 (日本物理学会編)東海大学出版会
 危険な話 (広瀬 隆)八月書館
 電子情報通信ハンドブック オー ム 社
 デジタルフィルタデザイン(三谷政昭)昭 晃 堂
 光ファイバ通信入門 改訂2版
 (末松安晴等)オー ム 社
 プラスチック光ファイバの応用技術 電気書院
 計算機科学/ソフトウェア技術講座 共立出版
 5:アルゴリズムと計算量(野崎 昭弘)
 6:数値計算術 (森口 繁一)
 13:ソフトウェアのテスト技法(玉井哲雄等)
 コンピュータ概説 (宮崎正俊等) "
 LSIによる論理設計 (奥川 峻史) "
 ロボット君 (V. N. プスレンコ)社会思想社
 ロボット工学 (広瀬 茂男)装 華 房
 実習 マイコン制御技術 (桐山 清)日刊工業新聞社
 ロボット機構学 (牧野 洋等) "
 信号解析とシステム同定 (中溝 高好)コロ ナ 社
 自動制御 (佐藤達男等)学 献 社
 制御工学基礎理論 (藤堂 勇雄)森 北 出版
 詳解 自動制御例題演習 (山口 勝也)コロ ナ 社
 岩波講座マイクロエレクトロニクス 岩波書店
 1-2:マイクロエレクトロニクス素子 1-2(菅野卓雄等)
 3-4:VLSI の設計 1-2 回路とレイアウト
 (渡辺 誠等)
 メカトロニクス入門ハンドブック
 (杉田 稔)日刊工業新聞社
 電子管の歴史 (電子管史研究会編)オー ム 社

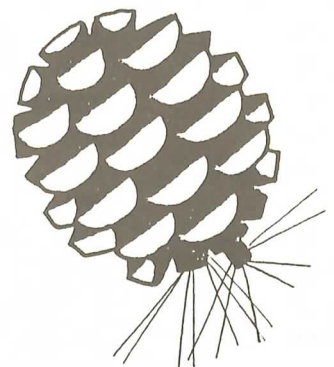
実用レーザ技術 (平井 紀光)共立出版
 レーザ光学の基礎 (伊賀 健一)オー ム 社
 技術資料 日本機械学会
 溶融加工学 (大中逸雄等)コロ ナ 社
 化学工学便覧 改訂5版
 (化学工学協会編)丸 善
 ニューガラス (作花 済夫)日刊工業新聞社

> 6 産 業 <

国土利用白書 昭和63年版(国土庁編)大蔵省印刷局
 「東京集中」が日本を減らす(八幡和郎)講 談 社
 新版 農業機械ハンドブック
 (農業機械学会編)コロ ナ 社
 中国の花ことば (中村 公一)岩崎美術社
 夢みる雑草たち (加藤 勝美)現代人物書院
 交通革新 (谷藤 正三)森 北 出版
 交通行動分析 (近藤 勝直)晃 洋 書 房

> 7 芸 術 <

さらば気まぐれ美術館 (洲之内 徹)新潮社
 コージ苑 (相原コージ編)小学館
 写真集 瀬戸内 (阿久 悠等)毎日新聞社
 結婚したくなる女 (岩城 滉一)ワニブックス
 浅草キッド (ビートたけし)太田出版
 レクリエーション活動の実際
 (池田勝等編著)杏林書院
 アスレチックトレーニング入門 第2版
 (R. J. Carey等)ソニー企業
 健康体力づくりのスポーツ科学
 (波多野義郎等)同朋社出版
 トレーナーのためのアスレチックトレーニング概論
 (Carl E. Klafs等)ソニー企業
 子どものスポーツ医学 (宮下充正等編)南 江 堂



図説 スポーツ傷害

(ラルス・ペーターソン等) 同朋舎出版
スポーツ指導者のためのスポーツ外傷・障害

(市川宣恭編) 南江堂

運動と栄養

(山岡誠一等) 杏林書院

水泳医学百科

(日本水泳連盟科学技術委員会編) 南江堂

野外教育の理論と実際(江橋慎四郎編著) 杏林書院

チャンピオン (クリス・ミード) 東京書籍

> 8 語 学 <

図記号のおはなし (村越 愛策) 日本規格協会

日本語と数理 (細井 勉) 共立出版

学研 漢和大字典 (藤堂明保編) 学習研究社

昭和流行語辞典(グループ・昭和史探検) 三一書房

DATA PAL '88 小学館

ドイツ人が日本人によく聞く100の質問

(柴田昌治等) 三修社

> 9 文 学 <

新潮日本文学辞典 増補改訂版

(磯田光一等編) 新潮社

人生の時刻表 (神 一行) KKベストセラーズ

鈴の鳴る道 (星野 富弘) 偕成社

全集 黒澤明 第1巻-第6巻 岩波書店

三毛猫ホームズの登山列車(赤川 次郎) 光文社

青函トンネル (秋永 芳郎) 講談社

それぞれの終楽章 (阿部 牧郎) //

少年 (ビートたけし) 太田出版

蟬しぐれ (藤沢 周平) 文藝春秋

子どもの隣り (灰谷健次郎) 新潮社

四季・波留子 上、下 (五木 寛之) 集英社

小説 瀬戸大橋 (井口 泰子) 福武書店

男女7人夏物語 (鎌田 敏夫) 立風書房

パイレーツによろしく (川西 蘭) 河出書房新社

ラブ・ソングが聴こえる部屋(//) 集英社

微熱少年 (松本 隆) 新潮社

長男の出家 (三浦 清宏) 福武書店

春 燈 (宮尾登美子) 新潮社

青が散る (宮本 輝) 文藝春秋

生きる日 死ぬ日 (水上 勉) 福武書店

恋愛相談 (諸井 薫) 文藝春秋

69 Sixty nine (村上 龍) 集英社

泣かないで女歌 (中島みゆき) 新潮社

海景幻想 (中村真一郎) //

豊臣秀長 上、下 (堺屋 太一) PHP研究所

われら梁山泊の好漢 1-4 (柴田錬三郎) 講談社

犬の系譜

(椎名 誠) 講談社

韃靼疾風録 上、下 (司馬遼太郎) 中央公論社

インド綿の服 (庄野 潤三) 講談社

ひとりだけの哀しみ (曾野 綾子) 光風社出版

優雅で感傷的な日本野球 (高橋源一郎) 河出書房新社

銀ちゃんが、ゆく (つかこうへい) 角川書店

静寂の声 上、下 (渡辺 淳一) 文藝春秋

仮釈放 (吉村 昭) 新潮社

乳ガンなんかには敗けられない(千葉敦子) 文藝春秋

男と女のおいしい関係 (犬養智子) CBS・ソニー出版

一度は有る事 (上坂 冬子) 中央公論社

北の人名録 (倉本 聰) 新潮社

新・歴史をさわがせた女たち(永井路子) 文藝春秋

遊び心 (大前 研一) 学習研究社

恋は二度目からおもしろい(落合恵子) KKベストセラーズ

心映えの記 (太田 治子) 中央公論社

私の青春日めくり (澤地 久枝) 講談社

生きて行く私 上、下 (宇野 千代) 毎日新聞社

優しさとしての教育 (灰谷健次郎) 新潮社

家族 (藤原 てい) 読売新聞社

気がつけば騎手の女房 (吉永みち子) 草思社

異国の窓から (宮本 輝) 光文社

シベリア追跡 (椎名 誠) 小学館

菩提樹の花咲く国で (張 さつき) 未来社

ドキュメント瀬戸大橋 山陽新聞社

極道の妻たち (家田 莊子) 文藝春秋

1 リットルの涙 (木藤 亜也) エフエー出版

戦場の村 (本多 勝一) 朝日新聞社

限りある日を愛に生きて (草薙 実等) 立風書房

雪はよごれていた (澤地 久枝) 日本放送出版協会

ちくま文学の森 筑摩書房

1: 美しい恋の物語 (安野光雄等編)

2: 心洗われる話

4: 変身ものがたり

5: おかしい話

6: 思いがけない話

完訳 日本の古典 小学館

第22巻: 源氏物語9 (阿部秋生等校注・訳)

第33巻: 今昔物語集 本朝世俗部 4

(馬淵和夫等校注・訳)

第34巻: 梁塵秘抄 (新聞進一等校注・訳)

第47巻: 謡曲集2 風姿花伝(小山弘志等校注・訳)

図説 日本の古典 集英社

7: 源氏物語 (秋山虔等編)

昭和文学全集 小学館

第6巻: 室生犀星、堀辰雄、等

第11巻: 尾崎一雄、丹羽文雄、等

第22巻: 中村真一郎、井上光晴、等

第24巻: 辻邦生、小川国夫、等

- 第25巻：深沢七郎、水上勉、等
第29巻：石原慎太郎、城山三郎、等
第30巻：清岡卓行、上田三四二、等

留学生日記 (佐藤素子等) 大 学 書 林
中国おもしろ古典語典 (村山 孚) 大 和 出 版
偉大なるデスリフ (C. D. B. ブライアン) 新 潮 社
ばくが電話をかけている場所

(レイモンド・カーヴァー) 中央公論社
スパイキャッチャー (ピーター・ライト) 朝日新聞社

岩 波 新 書 黄 版 岩 波 書 店
393：まちづくりの発想 (田村 明)
395：日本語以前 (大野 晋)
396：狂言役者 (茂山千之丞)
別冊：岩波新書の50年 (岩波書店編集部編)

岩波新書 新赤版

- 1：新しい文化のために (大江健三郎)
- 2-3：日本語 新版 上、下 (金田一春彦)
- 4：現代社会主義を考える (沢内 謙)
- 5：新哲学入門 (廣松 渉)
- 6：宇宙論への招待 (佐藤 文隆)
- 7：昭和将棋史 (大山 康晴)
- 8：当世・商売往来 (別役 実)
- 9：超伝導 (中嶋 貞雄)
- 10：世界経済入門 (西川 潤)
- 11：SDI批判 (豊田 利幸)
- 12：中国語と近代日本 (安藤彦太郎)
- 13：黒船異変 (加藤 祐三)
- 14：プライバシーと高度情報化社会 (堀部政男)
- 15：青鞥の時代 (堀場 清子)
- 16：ワープロ徹底入門 (木村 泉)
- 17：競場の人類学 (長島 信弘)
- 18：日本人の英語 (マーク・ピーターセン)
- 19：生物進化を考える (木村 資生)
- 20：エビと日本人 (村井 吉敬)
- 21：ゴルバチョフの時代 (下斗米伸夫)
- 22：女たちが変えるアメリカ (ホーン川嶋瑠子)
- 23：燃える中南米 特派員報告 (伊藤 千尋)
- 24：哲学以前の哲学 (松浪信三郎)
- 25：易のはなし (高田 淳)
- 26：日本人はどこから来たか (加藤 晋平)
- 27：石油を支配する者 (瀬木耿太郎)
- 28：緑の冒険 (向後 元彦)
- 29：日中アヘン戦 (江口 圭一)
- 30：天皇の肖像 (多木 浩二)
- 31：日本の幽霊 (諏訪 春雄)
- 32：演劇とは何か (鈴木 忠志)
- 33：地球環境報告 (石 弘之)

- 34：都市と水 (高橋 裕)
35：軍国美談と教科書 (中内 敏夫)
36：障害者は、いま (大野 智也)

岩波ジュニア新書 岩 波 書 店

- 135：四字熟語集 (奥平 卓等)
136：東京の歴史 (松本 四郎)
137：サイクルスポーツ攻略法 (五十嵐 高)
138：ドフトエフスキーのおもしろさ (中村健之介)
139：図解 新東京探訪コース (五百沢智也)
140：戦場で死んだ兄をたずねて (長部日出雄)
141：英語で thinking (西田 実)
142：たのしむ数学10話 (足立 恒雄)
143：とくべつ面白い理科 (鈴木皇編著)
144：和歌の読みかた (馬場あき子等)
145：経済のしくみ100話 (岸本 重陳)
146：若いやつは失礼 (小林 道雄)

カラーブックス 保 育 社

- 744：ディーゼルカー 1 (飯島 巖等)
745：洋菓子天国KOBÉ (村上 和子)
746：ディーゼルカー 2 (武藤和文等)
747：金沢 味どころ (橋場 志郎)
748：春の花100種 (妻鹿加年雄)
749：鎌倉 花の寺 (藤原健三郎)
750：奈良 寺の味 (ひらのりょうこ)
751：名古屋 ぶらり散歩 (大橋建之等)
752：おもしろ駅図鑑 1 (種村直樹等)
753：初夏の花100種 (西 良祐)
754：おもしろ駅図鑑 2 (種村直樹等)
756：ブルーリボン賞の車両 '88 (鉄道友の会編)
757：夏の花100種 (藤岡作太郎)
758：外湯めぐり (野口 冬人)

ブルーバックス 講 談 社

- B 335：水とはなにか (上平 恒)
B 571：調査の科学 (林 知己夫)
B 605：脳の手帖 (久保田鏡等)
B 607：続・太陽系45億年の旅 (岩崎賀都彰画・文)
B 609：超高真空がひらく世界 (小宮 宗治)



- B 610：人はどのように発達するか（上田 礼子）
 B 622：人間の手の話（荒井 孝和）
 B 629：流れのファンタジー（流れの可視化学会編）
 B 641：宇宙移民計画（A. T. ウルベコフ）
 B 644：遺伝子が語る生命像（本庶 佑）
 B 645：四次元の幾何学（中村 義作）
 B 646：だれが宇宙を創ったか（ロバート・ジャストロウ）
 B 647：創る・動くおもちゃ（酒井 高男）
 B 649：セックス・サイエンス（石浜 淳美）
 B 650：次世代タンパク質コラーゲン（久保木芳徳等）
 B 654：サーカスの科学（大槻 義彦）
 B 655：リーダーシップの科学（三隅不二）
 B 656：いたずら科学実験室（栗田 常雄）
 B 657：まだわからないことがある（吉永 良正）
 B 658：疲労と体力の科学（矢部京之助）
 B 660：一般相対論入門（ロバート・ゲロック）
 B 661：身近な血液ゼミナール（笹川しげる等）
 B 662：数学ぎらいの診察室（関根 鴻）
 B 663：現代化学の世界（日本化学会編）
 B 668：スキー上達の科学（奥田 英二）
 B 669：癌の生態学（佐藤 博）
 B 672：銀河旅行と一般相対論（石原 藤夫）
 B 673：磁石のABC（中村 弘）
 B 675：図解 恐竜はどんな生物だったか（福田芳生）
 B 676：タンパク質とは何か（藤本大三郎）
 B 677：方程式に強くなる（田村 三郎）

- B 678：電池の科学（橋本 尚）
 B 710：人体スペシャルレポート（Quark編）
 B 727：「エクセルギー」のすすめ（押田 勇雄）

新潮文庫

- 異端のすすめ（長谷川慶太郎）新潮社
 続・マッハの恐怖（柳田 邦男）〃

ゼンリンの住宅地図

弘文図書出版

- 広島市 西区・中区
 〃 東区・南区
 〃 安芸地区
 〃 安佐地区
 〃 佐伯地区
 呉 市

寄贈図書

- 広島女子大学地域研究叢書 広島女子大学
 9：老年期の衣生活（水野上与志子）
 まちづくり30年 住宅・都市整備公団関西支社
 ピアース自伝 国際科学技術財団
 ADVANCES IN MAGNETOOPTICS
 磁気光学国際シンポジウム出版委員会
 呉市史 第6巻 呉市
 日本石油百年史 日本石油株式会社
 小説・日本興業銀行 4 日本興業銀行

編集後記

最近の若者の特技(?)の1つに、同時に2つ3つのテレビ番組を見ることがあげられています。リモコンの発達で遠く離れていても、ボタン1つでチャンネルをきりかえることができるようになって、コマーシャルになればチャンネルをかえ、自分のお気に入りの歌手が出ない時にはまたチャンネルをかえといった風にするそうです（という私もだんだんこの傾向が見えはじめてい

るのですが）。聖徳太子のごとく、たくさんのかたとを同時にやってしまうのですから、これは大変な能力だとは思いますが、はたで見ていると何ともせわしいものです。このままでは、じっくり1つのことに集中する時間を持てなくなってしまうのでは、と少々心配もしています。“読書の秋”です。ゆったりと落着いて1冊の本を味わってもらいたいものです。（宇根記）